

比較文化論

No. 37

日本比較文化学会第 41 回全国大会
2019 年度国際学術大会
発表抄録

於 同志社大学今出川キャンパス

2019 年 5 月 18 日(土)

日本比較文化学会

The Japan Association of Comparative Culture

〈海外提携学会〉

韓国日本文化学会

台湾日本語文学会

淡江大学村上春樹研究センター

台湾日本語教育学会

日本比較文化学会第 41 回全国大会・2019 年度国際学術大会

プログラム

日時：2019 年 5 月 18 日（土）

会場：同志社大学今出川キャンパス（京都市上京区）

<https://www.doshisha.ac.jp/information/campus/imadegawa/imadegawa.html>

スケジュール：

8:45～9:30 理事会（寒梅館 6F 大会議室）

9:35～10:00 総会（良心館 RY305）

10:10～12:10 シンポジウム（良心館 RY305）

テーマ：「比較文化の教育と研究の新潮流」

13:00～16:10 研究発表（良心館 RY401～RY409）

16:20～17:10 講演（良心館 RY305）

阪田真己子先生（同志社大学文化情報学部教授）

「私たちはなぜ笑うのか—笑い研究の潮流と課題—」

17:10～17:15 閉会（良心館 RY305）

18:00～20:00 懇親会（「がんこ高瀬川二条苑」）

懇親会にご出席の会員は、5 月 10 日（金）までに懇親会費の振り込みをお願いいたします。

会 費 6,000 円

振込先 南都銀行 平城支店 普通口座 0 3 7 6 4 2 3

日本比較文化学会関西支部 代表山内信幸（やまうちのぶゆき）

すべての教室においてパワーポイントが使用できます。データを USB メモリなどに入れてご持参くださり、発表前の昼休み・休憩時間に設定をお願いいたします。Mac を使用される場合は、接続用アダプターを各自でご用意ください。また、研究発表でレジユメをされる場合は、20 部をご自身でご用意ください。

シンポジウム

10:10～12:10 良心館 3階 RY305 教室

シンポジウムテーマ：「比較文化の教育と研究の新潮流」

司会：石崎一樹（奈良大学教授）

パネリスト：

1. 関東支部／東北支部より：
金塚基（東京未来大学准教授）
スポーツ観戦等における応援活動のあり方に関する比較教育的考察
—高等学校応援団の意味・役割に着目して—
2. 中部支部／関西支部より：
水町いおり（名古屋市立大学非常勤講師）
比較文化の重層性をフランス文学研究の新潮流に当てはめる
3. 九州支部／中国・四国支部より：
林裕二（西南女学院大学教授）
日本語と英語の翻訳比較による比較文化研究の潮流
4. 韓国日本文化学会より：
李有姫（韓国・大田大学非常勤講師）
人工知能時代における言語文化教育と未来への課題
5. 台湾日本語文学会より：
頼振南（台湾・輔仁大学外国語学部長／日本語文学科教授）
比較文化の教育と研究の新思潮：一冊の本から受けた啓発
6. 台湾日本語教育学会／淡江大学村上春樹センターより：
葉凌（台湾・淡江大学日本語文学科助理教授）
AI（人工知能）導入による台湾日本語教育・研究への期待

研究発表

前半：13:00～14:30

後半：14:40～16:10

【第1分科会：教育理論・教育実践】良心館 RY401

〈前半〉

司会：公文素子（高知大学非常勤講師）

1. 関口英里（同志社女子大学教授）
実践的学びとしてのプロジェクトプランニング
—未来に向けた地域活性化イベントを通して—

2. 藤山和久（広島経済大学助教）
「制御機構」が教育に及ぼす影響について
—高専生と私立大学生の比較調査—

3. 奥村訓代（高知大学名誉教授）
技能実習生と日本語
—高知と滋賀の比較から—

〈後半〉

司会：奥村訓代（高知大学名誉教授）

4. 陳帥（九州大学大学院博士後期課程）
ゼロ初級者向けの日本語学習プログラムの開発と試用
—地域日本語教室における参加型学習活動の試み—

5. 公文素子（高知大学非常勤講師）
初級日本語テキストとやさしい日本語から学ぶ防災対策

6. 林永彦（韓国・韓南大学校教授）・金泰永（韓国・江陵原州大學校教授）
日本の大学におけるサービスラーニング（Service-Learning）の導入実態と運営考察

【第2分科会：言語学・対照言語学・言語教育学①】良心館 RY402

〈前半〉

司会：山崎祐一（長崎県立大学教授）

1. 孫睿卿（同志社大学大学院博士前期課程）
中国人日本語学習者の聴解力向上のための一考察
—音素の弁別や語彙の意味理解と資格試験の関連性を中心に—

2. 嚴馥（慶應義塾大学非常勤講師）

日中両言語の色彩語の認知的差異

—「物名＋色彩語」を中心に—

3. 李岸（九州大学大学院博士後期課程）

日本語運用能力を高めるタスクベースシラバスの効果に関する実証研究

—中国の大学における日本語視聴説授業を事例に—

〈後半〉

司会：北林利治（京都橘大学教授）

4. 趙東玲（金沢大学大学院博士後期課程）

不同意表明会話における関係修復行動後の会話展開

—合意形成に向けた会話展開の日中比較—

5. 高橋栄作（高崎経済大学教授）

子どもによる読解時の音読と黙読による効果の検討

6. 山崎祐一（長崎県立大学教授）

異文化理解を視野に入れた内容重視の英語指導

—地域とリンクした取組を通して—

【第3分科会：言語学・対照言語学・言語教育学②】良心館 RY403

〈前半〉

司会：堀口誠信（徳島文理大学教授）

1. 橋尾晋平（同志社大学大学院博士後期課程）

英語教育における日本語母語意識の気づきの重要性に関する一考察

—初級英語学習者の言語転移の克服に向けて—

2. 河内健志（高崎経済大学非常勤講師）・高橋栄作（高崎経済大学教授）

日本人英語学習者の母語に関する明示的知識の利用に関する考察

3. 大谷鉄平（長崎外国語大学特任講師）

宣伝文に用いられる語句の商用的作用

—雑誌記事見出しにみられる「～ないと損」の場合—

〈後半〉

司会：山内信幸（同志社大学教授）

4. 小野遥香（同志社大学文化情報学部卒業生）

韓国人の人称表現使用に関する考察

—家族関係を中心に—

5. 陳志文（台湾・国立高雄大学教授）

副詞形「○○に」「○○的に」についての考察

6. 落合由治（台湾・淡江大学教授）

台湾における日本語とその表現文化の位相

—本土化を巡る機能をめぐって—

【第4分科会：文化・多文化理解①】良心館 RY404

〈前半〉

司会：林裕二（西南女学院大学教授）

1. 五十棲愛璃乃（京都外国語大学大学院博士後期課程）

学生結社オルデンとドイツの学生歌の緊密な関係性

2. 菅野瑞治也（京都外国語大学教授）

ドイツ語圏におけるフェミニズムの展開と決闘の衰退

3. 今野善伸（宇都宮大学大学院博士後期課程）

樹木葬 NPO 法人エンディングセンターにおける墓友の事例研究

—「都市型ネットワーク」を通じた会員間の試み—

〈後半〉

司会：金志佳代子（兵庫県立大学教授）

4. 森下一成（東京未来大学准教授）

沖縄県大宜味村における神アサギの形態上の変化について

5. 白須洋子（横浜商科大学特任講師）

茶の湯における「見立て」の手法とコミュニケーション

6. 松本きみゑ（大阪大学大学院博士後期課程）

茶書にみる茶道における人間形成

—「形のない文化」と「型」—

【第5分科会：文化・多文化理解②】良心館 RY405

〈前半〉

司会：鈴木宣行（創価大学教授）

1. 郭潔蓉（東京未来大学教授）
多文化社会における高度人材の獲得
—九州における留学生と企業をつなぐ事例研究から—
2. 東本裕子（横浜商科大学准教授）・白須洋子（横浜商科大学特任講師）
海外短期英語研修が学生に及ぼす影響に関する一考察
3. 頼錦雀（台湾・東呉大学教授）
多言語・多文化共生台湾におけるアイデンティティ

〈後半〉

司会：郭潔蓉（東京未来大学教授）

4. 邱若山（台湾・静宜大学教授）
宮脇俊三『台湾鉄道千公里』に見る異文化理解と紹介の方法
5. 鈴木宣行（創価大学教授）
セネガル・ダカールにおける民衆の思考法と日常生活上の価値観
—マンガ“Goorgoorlou”から読み解く生活規範と“夫と妻”—
6. JI-XIANG, YANG (National Sun Yat-sen University, Taiwan)
The Orientation of Asia Festival :
Solar Terms, Folk Custom, Culture Tradition, and Literature

【第6分科会：比較文化・外国文学・日本文学】良心館 RY406

〈前半〉

司会：丸橋良雄（神戸女子大学教授）

1. 上杉裕子（呉工業高等専門学校准教授）
最新書簡集2冊に見る詩人 Sylvia Plath の素顔と仮面
2. 原田寛子（福岡工業大学准教授）
「老い」を転覆させる：
Margaret Drabble の *The Dark Flood Rises* における終わらない生

3. 藤倉恵子（京都産業大学名誉教授）

ブリューゲルの『ゴルゴタの丘への行進』

—フーコーの指摘する〈癪者のまなざし〉との関連において—

〈後半〉

司会：伊藤豊（山形大学教授）

4. 堀秀暢（津山高等工業専門学校非常勤講師）

デジタルアリス

5. 都基弘（韓国・Hanbat 大学教授、早稲田大学・博報財団 第十三回「国際日本研究フェローシップ」招聘研究者）

鎌倉時代の匙の文化史に関する一考察

—『厨事類記』を中心に—

6. 林盛奎（韓国・白石大学校教授）

『破戒』から『春』にいたる道

【第7分科会：日本文学・外国文学】良心館 RY407

〈前半〉

司会：中村友紀（関東学院大学教授）

1. 道合裕基（京都大学大学院博士後期課程）

岡本綺堂「蝶合戦」と山田美妙「蝴蝶」の間テキスト性について

2. 黄如萍（台湾・国立高雄餐旅大学准教授）

日影丈吉「猫の泉」論

—撮取の関係を兼ねて—

3. 范淑文（台湾・国立台湾大学教授）

村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』にみる暴力

—「アイロンのある風景」及び「タイランド」を考察のテキストとして—

〈後半〉

司会：藤岡克則（大阪産業大学教授）

4. 葉凌（台湾・淡江大学助理教授）

AIによる文学研究の新潮流

—村上春樹の短編小説を例にして—

5. 何資宜（台湾・国立高雄大学助理教授）

太宰治「竹青」試論

—作品の裏表構造に潜む対中文化工作の影—

6. 曾秋桂（台湾・淡江大学教授）

グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『地球にちりばめられて』

—日本が消滅したことの真意について—

【第8分科会：比較文化研究①】良心館 RY408

〈前半〉

司会：白鳥絢也（常葉大学准教授）

1. 陳翰希（早稲田大学大学院博士後期課程）

三月三日・上巳の起源と伝承について

—日中比較民俗学の視点から—

2. 吳雪虹（台湾・高雄市立空中大学助理教授）

漱石漢詩と莊子

—題自画を中心に—

3. 李尚珍（山梨英和大学准教授）

日韓相互理解モデル・浅川巧

〈後半〉

司会：佐藤和博（弘前学院大学教授）

4. 張宇（大阪市立大学大学院博士後期課程）

日中の民間説話から読み取れるジェンダー観

—異類婿譚から考察する—

5. 金英（韓国・大邱韓醫大学教授）

森鷗外と伽羅

【第9分科会：比較文化研究②】良心館 RY409

〈前半〉

司会：三浦秀松（武庫川女子大学准教授）

1. 周聖來（横浜外国語学校アーキヴォイス顧問）

マカオの『知新報』から見る、梁啓超の東学（東洋の学問）影響下の新聞思想について

2. 小島明子（東京福祉大学・大学院留学生教育センター基礎教育特任講師）
清末中国の雑誌『教育世界』における西洋文化の受容
—王国維周辺にもたらされたゲーテ資料を中心に—

3. Petra KARLOVA（Assistant Professor, Waseda University）

Karate for Life:

From the Experience of Sri Lankan and Japanese Karate Practitioners

〈後半〉

司会：梶原雄（同志社大学嘱託講師）

4. 岩佐托朗（大阪経済大学准教授）
日本的経営文化としての終身雇用制度
—ヨーロッパの学術的イメージの変遷において—

5. 高坂京子（立命館大学教授）
教育の視点からみたオランダと日本
—比較文化的考察—

スポーツ観戦等における応援活動のあり方に関する比較教育的考察

—高等学校応援団の意味・役割に着目して—

金塚基（東京未来大学准教授）

日本の学校教育では、自分のクラスや学校の仲間を応援することが教育指導の目的のひとつでもあるかのように、部活や学校行事等などを通じて集合的な応援活動がおこなわれてきたといえる。

とくに高等学校の野球の大会などでは、応援リーダー（応援団／応援指導委員会などと呼ばれる）とされる小集団があらわれて、猛暑のなかでも変形学生服を借用して巨大な応援旗を掲げたりしながら、独特な文化的象徴および身体動作そして発声を用いて集団的な応援活動を統制したりしてきたのである。

この独特な文化的象徴を用いた集合的な応援の統制方法は、他の国や地域の文化にはみられない日本の文化的独自性があらわれているのであるが、一般的には通常のこととしてとくに気にすることもなくスルーしてきたといえる。

もちろん他の国々でも、チアがいたり伝統的な大学のカレッジールを掲げながら集団的な応援活動を統制するリーダーが存在してきた。近年では、某国の美女応援団といわれる集団のなかに、応援を統制するリーダーの姿がテレビのニュースなどで報道されていた記憶のある人もいるだろう。

しかし、日本の応援団といわれるリーダーが、他の地域のリーダーたちとは決定的に異なる部分がある。それは、集団的な応援をリードする際の姿勢およびそれらの技法の習得過程における違いである。日本の伝統的な応援団では、単に技能的な習熟を求めて訓練に励み、実践においてその役割を効果的に果たしているとはいえない。

確かにそれを伴うことも事実であるが、より重要とされるのは、応援対象である選手の勝敗に向けた苦闘ならびに練習の辛苦以上のテンションを伴うような鍛錬ならびに実践を自らに課しているという点である。身を削る理不尽な修行のような訓練を行うことにより自己犠牲的な精神を養い、それにより昇華された気合と気迫が、集団的な応援の力を高めることにつながる（はずだ）という思想が存在するかのようである。

これまで本報告者は、そうした日本の高等学校の応援団の存在的な意味・役割が表出されていると考えられる応援のスタイル、演舞（身体動作）、そして発声について観察を行ってきた。本報告では、それらに関する若干の試みを紹介したい。

比較文化の重層性をフランス文学研究の新潮流に当てはめる
水町いおり（名古屋市立大学非常勤講師）

グローバル化の波はさらなる広がりを見せ、もはや伝統的に行われてきた「幾つかの異なる対象を比較する」という手法だけでは、多様化する世界の在りようを説明できない可能性がある。

そのような現状において比較文化を教育するにあたり、最も注視せねばならないのはグローバルな視点である。すなわち、異なる対象を比較したうえで、その比較した結果と意味を広く世界の中に位置づける必要性こそが求められているのではないだろうか。ミクロからマクロへと視座を移行し、マクロな世界から再び比較の視点に戻る一連の動きを、筆者は「再定義」と呼ぶ。複数の比較と複数の視点によって、多様性を増す社会に対する一層の理解が深まることについて検証し、比較文化の多様性、重層性を明らかにし、「再定義」を繰り返すことで、マルチカルチュラルな比較文化の意識を醸成することが、現在の比較文化教育に求められた課題であることを提案したい。

また研究の新潮流として、筆者の研究対象であるフランス近代文学を取り上げる。文学研究は、テキストそれ自体に重点を置き、より深奥へと分析を深めることが一般的であるため、縦への「深まり」が重視され、横への「広がり」が看過される傾向にあった。そのような研究の閉塞性を乗り越えるのに、「比較文化」「比較文学」研究は大変有益であり、比較文学という手法は、古典的なテキスト分析に比すれば「新しい」研究であると言える。

このような文学研究の背景を概観したうえで、筆者の比較文学研究の動向を例に挙げて、比較文化の新潮流について分析する。筆者の論文は、伝統的な研究手法である「テキスト研究」「作品論」「作家論」から、教育、ジェンダー、比較文学、植民地文学、クレオールと変化している。これらの具体的な変遷を通して、現在の比較文学研究の動向について具体的に示し、新たな研究の可能性とその教育方法について考察を行いたい。

日本語と英語の翻訳比較による比較文化研究の潮流

林裕二（西南女学院大学教授）

全国大会・支部会等の研究発表では、今まで比較を方法にした様々な研究が行われてきたが、基本にあるのは言語資料をベースにする分析である。

幅広い比較文化の対象分野の中で、発表者は主に翻訳について研究をしてきた。文学の翻訳である。日本語から英語への訳では、万葉集、川端康成、村上春樹をこれまで扱ってきた。万葉集の翻訳は、日本学術振興会（1940）と Ian Hideo Levy（1981）である。川端作品は、『伊豆の踊子』（Edward G. Seidensticker 1954、再訳1997）、『雪国』（Seidensticker 1956）、『山の音』（Seidensticker 1970）である。村上作品は、『ノルウェイの森』（Alfred Birnbaum1989、Jay Rubin 2000）等である。英語から日本語への翻訳作品は、Ishiguro Kazuo の *An Artist of the Floating World*（飛田茂雄 1988）を扱った。

日本語から英語への翻訳の場合には、Seidensticker と Birnbaum や Rubin との間には、翻訳の姿勢に決定的な違いがある。Seidensticker は日本語の原作にほぼ忠実に訳すことを心がけていた。彼が『伊豆の踊子』を二度も訳したのは、最初の翻訳では訳さなかった部分があったことからの反省である。それに対して Birnbaum や Rubin は原作に編集の手を大きく入れている。例えば大きくカットすることもある。これらの姿勢の違いは翻訳において、起点言語（source language）と目標言語（target language）のどちらの文化を重視するかの問題でもある。また外国文学の翻訳が、一部のインテリに読まれていた時代から、一般大衆に読み手が広がってきた時代へと移り変わってきたことも反映している。

今回は、翻訳に関する比較文化研究として、言語的な面と文化的な面を中心に論じていくことにする。

人工知能時代における言語文化教育と未来への課題

李有姫（韓国・大田大学非常勤講師）

情報通信技術（ICT）が経済と社会全般に融合され、革新的な発展を遂げている4次産業革命の時代において、ビッグデータ、人工知能、IoT（モノのインターネット）、先端ロボット工学、無人運送手段、自律走行、3Dプリンティング、ナノ・バイオテクノロジーなどのコア技術は、すでに私たちの生活に大きな影響を及ぼしている。

2016年1月の世界経済フォーラム（Davos Forum）で会長クラウス・シュワブ（Klaus Schwab）は、システムの革命と共に急速に変化する4次産業革命時代の社会において、最も大きな変化の一つは「教育」であると述べた。彼は、また同年10月18日、韓国国会が主催した4次産業革命フォーラムでのスピーチで、AI（人工知能）を用いた「カスタマイズ教育の重要性」と人文学的教育によって培う「ヒューマニズム」が人材育成のキーポイントであるという主張がなされた。

産業界においても、新たな技術や産業の誕生に伴って、分野間の融合・連携がなされ競争的コラボレーションが形成されつつある。このような状況において、未来の社会が求める人材像は、探求し続けることのできる「創意的」人材であり、問題解決のための「協働意識」を持てる人材である。このような人材の育成を目指した教育システムの改革が世界各地で始まっている。韓国の小・中・高教育においても、すでに問題解決、協同学習、創造的能力の育成などのためのデジタル教育が重点的に取り入れられ、フリップトラニング（Flipped Learning）、問題解決学習（PBL）などの教授法が導入された。大学教育においては、オフラインとオンライン（MOOC）の混合学習教育（Blended Learning）の連携やビッグデータ分析の研究が重視される一方で、デジタル教育の進行速度やシステム整備等の遅れが指摘されている。

今後、知能情報技術の急激な発展によって、教育は変化を余儀なくされるだろう。今、大学は高等教育におけるパラダイムシフトの舵取りを求められていると言える。この時代の要請に応えるため、新たな産業革命時代に必要な革新的な教育の方法を模索し、適用可能な新たな教科課程と教授法、教材、未来へのビジョン等を大学は提示すべきである。このような背景と必要性を踏まえ、本研究では、第一に、将来の人材育成に必要とされる教育のパラダイムシフトについて概観する。第二に、人工知能通訳・翻訳機が人間を代替している現社会において、言語文化教育の分野ではどのような教授法が用いられ、それに対してどのような評価が下されているかを考察する。第三に、現在の言語文化教育とその制度上の諸問題を論じ、教育革新のための教授法、教科課程、教材などに関する課題を検討し、未来の教育のためにどのように対応し発展させていくべきであるかについて解決方向を提示する。

比較文化の教育と研究の新思潮：一冊の本から受けた啓発
頼振南（台湾・輔仁大学外国語学部長／日本語文学科教授）

8年前に一冊の本から啓発を受けてから私個人が教育と研究においては少しずつ変わってきた。これは2008年に日本に邦訳された『アイデアのちから (Made to Stick)』（ハース・チップ／ハース・ダン著、飯岡美紀訳、日経BP社）である。この本は、「記憶に粘る（心に焼き付く）」という点をより深く、より多角的に取り上げ、一度聞いたら決して忘れないメッセージ、人を行動に駆り立てるようなアイデアの共通点を以下のようにまとめている。

- 単純明快である (Simple)
- 意外性がある (Unexpected)
- 具体的である (Concrete)
- 信頼性がある (Credentialed)
- 感情に訴える (Emotional)
- 物語性がある (Story)

本書では、これらの英単語の頭文字をとって「SUCCEsS」と呼んでいる。素人でもこの原則を頭に入れて自分のアイデアをチェックすれば、確実にその伝え方が改善できる。

勿論、これは全く新思潮とは言えないほか、少し古い本だが、普遍的に教育と研究に役立つフレームワークだと納得する一冊である。この場を借りて、日本語教育も含めた台湾外国語教育を例にして『アイデアのちから』から得た感想と実行を紹介しながら、いかに教育と研究との「知の呪縛」からアイデアを相手に理解させるかを考えたい。

確かに教育者と研究者にとっては新しい「アイデアを作る方法」が大事だが、そのアイデアを他人に伝える（焼きつける）方法が下手だったら、折角のアイデアは無駄になる。どんなに素晴らしい教育法と研究法でも人に伝わらなければ教育者と研究者の自己満足にすぎない。教育と研究を良い方向に変えたければ、良いアイデアを多くの人に伝える必要がある。

AI（人工知能）導入による台湾日本語教育・研究への期待

葉凌（台湾・淡江大学日本語文学科助理教授）

携帯型ペン端末でページに触れると日本語が聞ける教材やクラウド技術を応用した日本語学習システムが展開されているように、台湾では新しい技術が使われて、常に効率的な日本語教育が目指されている。

大学などの高等教育機関において、学習者に最大の学習効果をもたらせるように、ピア・リーディング、TEA（Thinking At the Edge）、3x3+3などの指導方針が導入されている。

しかしながら、学習者の関心は必ずしも日本語教師（研究者）のものと合致しているわけではない。例えば、日本語学研究において、言語使用の現状を分類したり体系化したりして、言葉の差異を分析するというような研究はよく見られるが、学習者はかえって「こういう場合、日本語でどう表現するか」に強い関心を持っている。こうして、日本語研究と日本語教育の現場との乖離が生じている。

日本語教師は学習者のニーズに合わせる一方、如何にして自身の研究を実際に教育現場に投入するかと考えなければならない。打開策として、AI（人工知能）による日本語研究を提案してみたい。なぜAIを日本語研究に導入しようとするかという点、AIは人間が短期間で処理できない膨大な資料の処理ができるからである。また、繰り返しの作業をするのもAIは人間より効率がいいと言われている。AIを日本語研究に導入することによって、日本語教師や研究者は複雑な統計や資料の整理から解放されて、新たなアイデアを生み出せる時間が確保できることが期待される。

実践的学びとしてのプロジェクトプランニング
—未来に向けた地域活性化イベントを通して—
関口英里（同志社女子大学教授）

筆者担当の「プロジェクトプランニング演習」は、学生が数名単位でチームを構成し、自習実践的な活動から学び、地域社会の課題解決や文化と経済の活性化を目指す演習科目である。産官学及び市民との連携を軸に、毎年各チームが様々な企画を実施し、地元へ貢献する独自の取り組みを継続している。本発表では、昨年度の事例とその成果を提示する。

2年次生6名からなるチーム「HIKAmaker」は、本学所在地である京田辺市の地域社会と経済の活性化を最大の目標とし、その基盤作りとして、子供たちの郷土愛促進と、消費が低迷する地元商店街への再注目と集客を必須課題とした。同チームは「京田辺でキラキラ輝く思い出作り」をコンセプトに商店街で地元の子供達を主役としたイベント「キララファッションショー」を企画、2018年11月に実施し、多角的課題解決の戦略を実現した。京田辺市では、男女とも20代前半を機に地元を離れる割合が多く、30代以上の人口が急激に減少する傾向にある（京田辺市2017年度統計調査）。また、地元への愛着は居住年数ではなく地域での幼少期の良質な経験に大きく依存し、その後の貢献活動にも影響するとの研究結果もある（鈴木2008, 引地2009他）。そこで同チームは、賑わう商店街での人的交流と輝かしい体験で、着実かつ長期的に子供の地元志向を醸成することを目標とした。イベント成功のため独自の構成と内容に工夫を凝らし、メインイベントとなるランウェイウォークに加え、人気ご当地キャラ「キララちゃん」との交流の場を設け、3つのお洒落&DIYブースの設置、本学ミスキャンパスのファッション講座開催などで満足度向上を図った。また、開催告知や出場者募集には専門領域であるSNS等のメディアツールを駆使した。更にはアナログな活動も重視し、要所でのビラ配り、地域の幼稚園や学習塾訪問、また市広報の活用等に努めた。その結果、約60名の参加者を得てイベントは盛況し、多数のメディアでも報道されて市のPRに繋がった。実施後の参加者アンケート結果も「良い思い出作りに大変役立った」99%となっており、子供達からの礼状も届いた。こうした事実は、同企画が目指した多角的な地元活性化と将来繁栄の基礎作りにおいて一定の成果を収めたことを示している。同チームの実績と地域貢献のユニークな活動は、学生プロジェクト全国発表大会「トレードフェア」で各界識者の審査により評価され、特別賞を受賞した。本取り組みは、市民や自治体、地元団体との協働を促進するイベントで、地域の将来を担う子供を主役としつつ世代を越えた人々が交流できる演出を実現した点に意義があったといえる。更には地域貢献のみならず、学生の創造的社会活動による自律性や、個人能力と人間的成長を促した事にも大きな利点があった。今後もこうした実績を踏まえ、実践学習と地域連携に基づいた活動をさらに発展させてゆきたい。

鈴木春名他「地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究」『土木計画学論文集』25(2)2008
引地博之他「地域に対する愛着の形成機構」『土木学会論文集』Vol.65 No.2 2009

「制御機構」が教育に及ぼす影響について
—高専生と私立大学生の比較調査—
藤山和久（広島経済大学助教）

金子（2007）は、大学という機構について「学生の学習に対するフォーマルな制御機構が弱い」（115頁）と指摘する。確かに大学の場合、高等専門学校（以下「高専」）あるいは高等学校とは異なり、ホームルーム（学級制）が必ずしも設置されているとは限らず、基本的に授業科目の履修や単位取得に関して、学生がその責任を負うことになる。したがって、大学という「制御機構」は、学生の学習を制御することが難しい側面を含んでいる。その一方で、高専の場合、通例、各学科にホームルームが設置されている。それゆえ、欠席が続くと担任や授業担当者による指導や注意喚起が行われることが多い。このことから、高専においては、大学に比べ相対的に自由さの度合いが低いと考えられ、概して「制御機構」が強いことが示唆される。

そこで、本報告の目的は、高専と私立大学における制御機構の強弱の比較調査を通じて、制御機構を構成する要素を探究し、それが教育にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることである。この研究目的を明らかにするために、本稿は半構造化面接法をもちいたインタビュー調査を行う。研究対象は、高専5年生と私立大学2年生の学生である。インタビューでは、主に制御機構に関する具体例や体験談などの聞き取り調査を実施している。

本報告は、上記の研究目的を比較文化的な手法から明らかにすることで、制御機構を構成する要素を示し、それが教育に与える影響を示唆する。

引用文献

金子元久（2007）『大学の教育力—何を教え、学ぶか—』筑摩書房。

技能実習生と日本語
—高知と滋賀の比較から—
奥村訓代（高知大学名誉教授）

「2018年1月1日現在6万6,498人（前年同期比1.9%増）にのぼり、またそのうちの約10%の6,914人（前年同期比6.1%増）だった」と聞いてなんの数字か分かるだろうか。不法残留者数に占める技能実習生の数である。また、「2013年からの5年間で延べ26,000人、2017年には7,089人」とは、なんの数字だと思われるだろうか。これは失踪した実習生数である（法務省2018年2月発表）。

このほかにも実習生に関しては、死亡と犯罪の関するニュースなどを耳にすることがある。

JITCO（公益財団法人 国際研修協力機構）によると、「技能実習制度は、従来より「出入国管理及び難民認定法」（昭和26年政令第319号。以下「入管法」という。）とその省令を根拠法令として実施されてきたが、今般、技能実習制度の見直しに伴い、新たに技能実習法とその関連法令が制定され、これまで入管法令で規定されていた多くの部分が、この技能実習法令で規定されることになった。

技能実習法に基づく新たな外国人技能実習制度では、技能実習の適正な実施や技能実習生の保護の観点から、監理団体の許可制や技能実習計画の認定制等が新たに導入された一方、優良な監理団体・実習実施者に対しては実習期間の延長や受入れ人数枠の拡大などの制度の拡充も図られています」とある（<https://www.jitco.or.jp/ja/regulation/>）。

本来、技術や能力を学びに来ている人々（非労働者）を、低賃金の労働者として働かせている現状には、大きな問題があるのを承知の上で、それを許容しなければならない日本の少子高齢化は深刻だといえる。しかし3者（実習生本人、実習生受入れ人、管理者）に加え、地域住民との間には、それぞれにかなりの温度差があるようだ。

このような状況を日本語指導（教育）と視点で改善できないものかというのが、今回の課題である。具体的には、高知と滋賀の実習生の現状と特色などを比較対象としながら、状況整理から具体的な問題点の提示および問題点の解決策などを模索したいと考えている。

ゼロ初級者向けの日本語学習プログラムの開発と試用

—地域日本語教室における参加型学習活動の試み—

陳帥（九州大学大学院博士後期課程）

地域日本語教育の主対象である「生活者としての外国人」の多くは就労や結婚を契機に来日し、仕事や日々の生活に追われ、計画的・継続的な日本語学習ができなく、不便な生活を続けている人が少なくない。とくに、来日初期段階のゼロ初級者に対して、各地域の日本語教室は様々な支援方法を試しているが、うまくいかない場合がよくある。ゼロ初級者とコミュニケーションが取れにくいいためニーズや学習状況がわからず、彼らにふさわしい学習内容や指導方法が見つからないのが現状である。また、個人によって、学習意欲はかなり差があり、おもしろくなく、あるいはストレスが大きいと感じればすぐやめてしまう学習者が多い。それゆえ、学習者が主体的に自分の学習を管理できるような学習プログラムの開発が必要になると考えてきた。

本稿ではゼロ初級者向けの日本語学習プログラム開発の背景を説明したうえで、作成の過程、また、作成したプログラムの構成と内容について報告する。さらに、学習者が主体的に参加できるように、参加型学習の手法を取り入れて地域日本語教室で実践を試みた。その間、事前のプレテスト及び事後テストを用いて、学習者の日本語能力の伸長を測った。そして、学習プログラムの内容と実践方法について学習者とボランティアのそれぞれに対するアンケート調査と学習者へのフォローアップインタビュー調査を行い、本学習プログラムの意義と改善点を明らかにした。本研究は地域日本語教室でゼロ初級者に対応するときの参考になるプログラムを提案するとともに、学習者が主体的に参加できるような実践方法を提示することを目指す。

初級日本語テキストとやさしい日本語から学ぶ防災対策

公文素子（高知大学非常勤講師）

1995年1月に発生した阪神淡路大震災では、外国人死亡者数が日本人の2倍、負傷者は2.4倍（100人当たり）の被害が出た¹。その原因は、災害情報・避難情報を得ることができなかった、地震による被害だけでなく、情報の面でも被害を受けた、日本語に不慣れた外国人にとって、専門用語（避難所・余震・ライフラインなど）は理解できなかったなどであった。京都府国際センターが2013年に実施した調査によると、地震に対して「とても不安」「やや不安」と感じている在留外国人は全体の58%と半数以上が不安を抱えているにもかかわらず、実際、防災対策を行っている在留外国人は45.2%と半数を切り、留学生に関しては35.8%であった。

本発表では、日々日本語を学び、災害時にも日本語で情報を得て、母語で情報を発信しやすい外国人留学生に焦点を当てながら、防災に特化した訓練・講習会ではなく、「日本語を学びながら防災について知る・学ぶ」ことができる日本語テキストに注目する。

初級日本語テキストに提示されている防災・災害に関する具体例として、

・A：インドネシアのスマトラ沖で地震があったのを知っていますか。

B：ええ。今朝のニュースを聞いて、ビックリしました。

出張中の主人と連絡が取れなくて、心配しています。：理由

・水や食料を用意しておく。：準備

ここでは、災害時の「理由」「準備」について提示されている。また、「非常袋を準備しておかない」というテーマで防災に関する会話文が提示されているものや地震発生を知らせるニュースをテーマにした読解文が、いずれも初級レベル（日本語能力試験N4・N3レベル）の教科書に提示されている。これは、初級レベルで防災に興味を持たせるだけでなく、学んだ日本語を活かして地域の外国人防災リーダーの役割を担うこともできる。

さらに、災害発生時に災害情報や避難情報を得るために必要な防災日本語の「やさしい日本語（日本能力試験N4²レベル）」の理解にもつながり、母語で災害情報を得ることができない外国人や短期滞在の外国人に対しても有効である。

災害・防災をテーマに扱った日本語テキストの調査・分析・考察を行い、災害時に必要な「やさしい日本語」の必要性についても言及する。

1 <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ2shitsumon.htm>

2 N4レベル 学習時間300時間、漢字300字程度、語彙1500程度
（参照：国際交流基金 <https://www.jlpt.jp/about/pdf/comparison01.pdf>）

日本の大学におけるサービスラーニング（Service-Learning）の導入実態と運営考察
林永彦（韓国・韓南大学校教授）・金泰永（韓国・江陵原州大学校教授）

本研究の目的は日本の大学におけるサービスラーニング（Service-Learning : SL）導入過程と運営実態を考察し、韓国大学における適用可能性を探ることである。SLとは1930年代教育学者ジョン・デューイ（Dewey）の体験的教育理論に基づいてアメリカ大学で1960年代後半から受け入れられ、1980年代共同体形成の市民性教育、1990年代地域社会における積極的参加による素養教育涵養という社会貢献型体験学習を基礎に共同体意識、体験参加、振り返りなど多角的思考能力を涵養する教育方法である。日本の大学では1990年代後半から積極的に導入された教育方法である。日本の大学で本格的に普及し始めたのは2000年代以降であり、日本中央教育審議会では2002年文部省大臣に「青少年ボランティア活動、体験活動の推進方策などに対して」という答申で大学、短期大学、高等専門学校などでボランティア活動やSL科目の開設などを勧告した。2007年には「学士過程教育の再構築にむけて」という審議経過報告書でSLは学士過程教育で有効な体験的学習法として薦められた。そして、最近日本小中高などでも総合的学習時間でSL授業を並行している学校が増加してきた。本論文でSLは他者との関係性を強調し、他者との関係を通して学ぶという意味で「体験学習」「経験学習」という概念として定義した。SLのボランティア活動との差は教育機関による教授法の一つでボランティア活動提供を通して学ぶという双方向的な意味を含んでいる。

本論文の研究方法は日本の大学のSL実態を把握するため、2019年1月に2回に分けて日本の9大学（早稲田、上智、ICU、成蹊、青山学院、明治学院、立教、関西学院、立命館）の現地訪問調査と文献調査を行った。調査結果は次の通りである。第一に、日本の大学は設立理念や特性化を生かした体験と振り返りを強調するSL導入が特徴であった。第二に、SLの類型は大きく三つであり、第一類型は科目履修型、第二類型は科目履修とボランティア活動連携型、第三類型は科目履修とプロジェクト連携型などであった。第三に、SLの活動地域には国内地域、グローバルインターンシップなどであった。第四に、SLの運営システムは専任教授、運営支援、学生コーディネーターなど多様な方法が動員されていた。第五に、SLは1995年神戸大震災をきっかけにボランティア活動から始まり、それ以降授業との連携が試みられた。第六に、SLの発展段階はボランティア活動—教科目との連携—SLの導入の順であった。

結論的に日本の大学のSLは授業と現場体験活動を連携する方式で学生たちの社会問題の関心を引き付け、社会的役割を認識させ、共同体市民性涵養、思考能力の涵養などが主な目的であった。このような研究結果は最近韓国学生たちの社会的関心を考えると今後韓国の大学でも拡大されると考えられる。

中国人日本語学習者の聴解力向上のための一考察
—音素の弁別や語彙の意味理解と資格試験の関連性を中心に—
孫睿卿（同志社大学大学院博士前期課程）

中国の日本語教育において、「聴く」・「話す」・「読む」・「書く」の4技能の中で、大学生が最も困難だと感じている領域は「聴く」技能である（尹 2001）。音声言語が聞き取れない要因として、そもそもその語彙が理解できていないこと、または、その語彙は既知であるが、音声そのものが聞き取れないことが考えられる（中村 2003）。一方で、中国語方言において、北方方言が話されている一部の地域（長江下流と南西地区）では、/n/と/l/の弁別がないとされ（大久保 2013）、また、日本語の単語認知過程において、中国語母語話者は、音韻表象から意味表象へのアクセスは困難であることが指摘されている（小森 2005）。これらを踏まえ、語や文を聴き取るために、音素の聴き取りと単語の聴き取り能力を向上させると、総合的な聴き取り能力も向上させることができることが指摘されている（大坪 1982・梅村 2003）。

本発表では、中国のある大学の1・2年生を対象に、3つの聴解調査を扱う。まず、ナ行音とラ行音の文字を聴き取るテストを行う。次に、短文の空所に入る漢字語彙を聴き取り、中国語で答えるテストを行う。さらに、初級学習者の音素と語彙を聴き取る能力が資格試験の成績とどのような関係性をもっているのかを検討するために、旧日本語能力試験4級と3級の各10問を使って、聴解テストを行う。

本発表では、2019年1月に中国語母語話者の日本語学習者6名（南方出身と北方出身各3名）を対象に実施したナ行音とラ行音の弁別テストと漢字語彙の聴解テストの予備調査の結果について報告する。まず、ナ行音とラ行音の弁別テストにおいて、中国の南方出身の協力者は、ナ行音とラ行音が弁別しにくいことが判明する。特に、「ヌ」と「ル」については、調査範囲と関係のない誤答の「ム」と「ン」と解答していることも確認できる。また、漢字語彙の聴解テストでは、日本語にのみ存在していて、中国語には存在しない語彙の誤答率が高く、さらに、選択肢が中国語で提示されるので、文字類似性が高い方の誤答率が高いという結果が導かれる。

【主要参考文献】

- 尹松. 2001. 「聴解ストラテジー使用と聴解力との関係について：日本語を主専攻とする中国人大学生の意識調査の結果から」『言語文化と日本語教育』21, pp.58-70.
- 梅村修. 2003. 「日本語の聴解指導—聴き取りを容易にする“知識”とは何か—」『帝京大学文学部紀要教育学』28, pp.117-143.
- 大坪一夫. 1982. 『日本語教育事典』東京：大修館書店.
- 中村飛鳥. 2003. 「英語の聴解に及ぼすスピード、ポーズ挿入及び個人差要因の影響」『京都大学大学院教育学研究科紀要』49, pp. 270-279.

日中両言語の色彩語の認知的差異
—「物名＋色彩語」を中心に—
嚴馥（慶應義塾大学非常勤講師）

色彩は抽象的な概念であり、正確に表現することは容易ではない。そのため、色彩語が成立する初期の段階では、人々はしばしば「物」を表すことば（物名）を用いて色を表現した。本発表では、「物名＋色彩語」という複合語の構成要素と構成方法の考察を通し、物と色の概念を関連づける際の、中国人と日本人との間にある認知的差異を明らかにしたい。

構成要素に関しては、日中両言語で物名の項目は概ね一致している。いずれも植物、動物、自然界の物、食べ物、文化関連の表現が多く含まれている。一方で違いもある。中国語の色彩語では、より花の種類が豊富で、動物の種類も鳥や獣のほかに水生動物など多岐にわたる。日本語の色彩語では、当時の文化に関わることばが大量に存在するが、中国語では同じ現象は見受けられない。

構成方法に関しては、日中両言語は、物と色との概念上の類似性から多くのメタファーが創られた点で共通している。しかし、色を細かく区別する際のアプローチには違いもある。中国人は、同じ物の全体から部分にフォーカスしてことばを創る「内的視点」をとることが多い。対して日本人は、意味的隣接関係のある別の物に目を移してことばを生み出す「外的視点」を多用する傾向にある。

日本語運用能力を高めるタスクベースシラバスの効果に関する実証研究

—中国の大学における日本語視聴説授業を事例に—

李岸（九州大学大学院博士後期課程）

21世紀に入って、コミュニカティブ・アプローチが外国語教授法の主流となっていて、言語教授法の目標は文法や文型の重視から、言語運用能力の育成へと変化していて、言語の学習には言語項目を重視することから、意味重視の課題遂行を通して学習することへの転換が見られた。SLAの実証研究に基づいて、TBLT (Task-based language Teaching) が提出され、コミュニカティブ・アプローチの代表的な教授法として注目を浴びた。一方中国では、2018年の4月に出版された「外国語言語文学類教学質量国家標準」により、大学における外国語学科は課程の設置から、人材育成の目標及び外国語能力の育成目標まで、たくさんの改革が見られた。特に日本語学科においては、「日本語聴解」を「日本語視聴説」という授業に変わり、いわば単一の「聞く」能力の育成から、「見る、聞く、話す」能力の育成へと変更した。それで、筆者はTBLTを「日本語視聴説」にどう実行するのか、TBLTは日本語運用能力（本論は主に「聞く」と「話す」能力を注目する）を高めるのに効果があるのかという問題意識を持つようになった。

本論は筆者がTBLTの理論や方法論に基づいて構築したタスクベースシラバス（理論や構築方法などは4月に別の国際シンポジウムで発表する予定）を用いて、中国のA大学で日本語学科の二年生を実験群として、一学期（計72コマ）をかけて実践授業を行ってから、授業前後の成績及び学生による自己評価をSPSSで量的分析し、また、統制群としてのB大学の二年生のデータと比較分析し、その効果を明らかにするものである。論文では、まず今回の調査で用いる日本語運用能力を評価するためのN2聴解試験や自己評価尺度の妥当性と信頼性を検討してからその調査データを使用した。比較分析は主に平均値を比較するT検定を利用した。その結果、①事前と事後のN2聴解試験の結果から見ると、両校とも聴解の成績が向上したが、A大学のほうが聴解の成績が有意的に高かった（ $t=2.029, df=45, p<.05$ ）；②学生の日本語の「聞く」能力と「話す」能力に対する自己評価は授業をする前と比べて有意的に高くなった（「聞く」 $t=-6.492, df=26, p<.01$ ；「話す」 $t=-7.073, df=26, p<.01$ ）。実践授業を通して、A大学の事後成績はB大学の事後成績よりよくなり、学生が自分の日本語の「聞く」と「話す」能力に対しても事前よりもっと自信を持つようになったと考察した。したがって、A大学で実行したタスクベースシラバスによる授業は学生の日本語運用能力を高めるのに効果があったと論文で結論した。

不同意表明会話における関係修復行動後の会話展開

—合意形成に向けた会話展開の日中比較—

趙東玲（金沢大学大学院博士後期課程）

趙（2018a; 2018b）は、相手と異なる意見を持つ場合、日本語母語話者（JNS）と中国語母語話者（CNS）はそれぞれ、どのような配慮を示しながら不同意を表明し、関係を修復するのかを分析した。趙（2018a）は、不同意表明の手順とその言語形式について考察を行い、不同意を持ち出す言語行動にどのような配慮が働いているのかを明らかにした。趙（2018b）は、不同意表明が相手のフェイスを脅かす発話行為と捉える Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論に基づき、不同意表明行動とその後の関係修復行為における配慮の様相を分析した。その結果、会話参加者間で「バランス指向性配慮行動」という特徴的行動が認められた。しかしながら、不同意表明とそれに伴う関係修復のための言語行動後に行われる合意形成に向けた相互行為については、これまで十分な分析がなされてきたとは言えない。そこで、本発表では、関係修復のための配慮言語行動は、その後の合意形成に向けた談話展開にどのような影響を与えているのか、そして、そこには日中両母語話者の異同が見られるのかどうかを探ることを目的とし、以下の2つの研究課題を設け、分析を実施する。

課題1: 不同意が表明された後の関係修復行動は JNS・CNS で異なるが、それは後続する合意に向けた会話の展開にどのような影響を与え、その結果、どのような会話展開になるのか。

課題2: 関係修復後の JNS・CNS の会話展開にはどのような違いが見られるのか。

本研究は、趙（2018a; 2018b）で提示された不同意表明・関係修復における配慮言語行動に関連づけ、その後の会話展開における合意形成に伴う配慮行動の日中の異同を分析するものである。その成果としては、異なる文化的背景を持つ人々の間での円滑なコミュニケーションへの寄与が期待される。

キーワード：不同意表明、関係修復行動、バランス指向性配慮行動、ポライトネス理論、合意形成

【参考文献】

趙東玲（2018a）「日中会話の不同意表明に見られる「配慮」の伝え方の分析」『人間社会環境研究』35, 金沢大学大学院人間社会環境研究科, pp. 33-48.

趙東玲（2018b）「不同意表明における「配慮」の日中対照分析」『言語科学会第20回年次国際大会予稿集』, pp. 150-153.

Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

子どもによる読解時の音読と黙読による効果の検討

高橋栄作（高崎経済大学教授）

「音読」は小学生の学習活動の基盤である。高等学校学習指導要領解説（平成 21 年 12 月）に次のように記載されている「小学校低・中学年の国語科において音読・暗唱，漢字の読み書きなど基本的な力を定着させた上で，各教科等において，記録，要約，説明，論述といった学習活動に取り組む必要がある」。また，正確な英文を瞬間的に話せる能力を身につけるために，「音読」は有効だという（森沢 2017）。

ところで「音読」と対になる読み方に「黙読」があるが，読解の際「音読」と「黙読」ではどちらに効果があるのだろうか。これまでに，母語獲得と言語習得を対象にした「音読」と「黙読」の比較研究がいくつかある。野呂・伊佐地・村尾・吉川・石川・種村・山中（2016）は，音読と黙読のどちらが英文読解力を正確に予測できるかという課題に取り組み，音読の正確さが読解力を予測するうえで重要であるといえるとしている。Fuchs, L. Fuchs, D. Hosp & Jenkins（2001）は，L1 研究において音読速度は黙読速度よりも学習者の標準読解テスト得点のよりよい指標となると述べている。さらに，Kim, Wagner & Foster（2011）は，5 歳 10 ヶ月から 8 歳 10 ヶ月の子どもを対象に，リーディング能力を予測するのに黙読と音読を比較した。音読が黙読よりも読解に有効であることがわかったが，彼らは，得られた結果は調査参加者の発育期間に特有なものであって，調査参加者の年齢構成が変われば，結果はかなり変わるかもしれないと述べている。

この年齢差要因について，田中（1989）のメタ分析によると児童期では「音読」が「黙読」より優位（音読 > 黙読）、成人期では「黙読」が「音読」より優位（音読 < 黙読）であるとする。さらに，児童期・成人期 — 音読・黙読の優越の交互作用が優位であったことから，「音読 > 黙読」→「音読 = 黙読」→「音読 < 黙読」の発達の様相を呈するのではないかとし，学年の変数に注目して分析したところ「音読 > 黙読」は「4 年生以下」に集中し，「5 年生以上」では「音読 = 黙読」の割合が増えていくとした。ここで，興味深いことに，子どもの脳機能は 9 歳以降に機能的形成が確立するという。この年齢以降は，脳の構造的な発達も著しいという。

以上のことから脳機能の形成の完成と読解のための「音読」と「黙読」の間になんらかの関係があると考えられる。そこで本考察では，苧坂（2002）による文章理解と統計的に有意であるリーディングスパンテストを用いて，子どもの「音読」・「黙読」における読解時の生理指標を簡易脳波計を用いて比較分析・検討する。読解における「音読」・「黙読」と年齢との間の考察により，いつ何をどのように指導すれば良いのかが明らかになる可能性があり，学習方法と教授方法の開発・提案につながると考える。

*本研究は「平成 30 年度高崎経済大学特別研究助成金」による助成を受けたものである。深甚の謝意を表す。

異文化理解を視野に入れた内容重視の英語指導

—地域とリンクした取組を通して—

山崎祐一（長崎県立大学教授）

英語とアメリカ文化が生活の中に混在する長崎県佐世保市は、2017年に「英語で交わるまち SASEBO」プロジェクトを立ち上げ、日常生活の中で英語を使う機会を得て、異文化圏の人々と相互作用をして自分の目的を達成したり、異文化の様々な状況の中で適切な行動がとれたりする市民の姿を目指している。英語を学ぶ子どもたちも市民の一部と捉え、同市では、文部科学省の事業の一環として、中学校と大学が連携し、「内容重視の英語教育」を実践している。言葉の教育なのだから、子どもたちは喋れて初めてコミュニケーション手段として、英語の楽しさや有益さを知るという考え方のもと、「話せる英語教育モデル校事業」として、英語指導のさらなる向上にも取り組んでいる。県レベルでも、2020年度より小学校で英語が教科化されるということを踏まえ、県英語教育推進協議会等において、報告や議論を重ねながら中学校英語教育の改革を進めている。そこで本研究では、学習者が英語を言葉として知るだけでなく、教室で学習した知識と獲得した技術を、さまざまな状況の中で適切に対応できるようなコミュニケーション能力を身に付けるために、従来の文法や語彙中心の指導法から、コンテンツ（内容）を重視した指導法に転換することの有効性を検証する。

特に、英語を話すことについては、新学習指導要領（2018）の外国語科の目標の中に、「即興で伝え合うことができるようにする」ことが強調されている。学習者に対して、文法などの形式を導入する前に、教科書で取り扱われている内容に着目させ、教師から学習者、または学習者から教師への発問を工夫することによって、学習者が内容に関して興味や関心を持ち、それについてその場で主体的に発言したり、次の学びにつないでいったりすることができるような教育の実践を試みている。事実発問だけでなく、推論発問や評価発問を活用することにより、行間を読んで心情に訴えかけたり、登場人物に命をふき込みながら感情移入をしたりすることによって、他者理解や異文化理解にもつないでくことができる。

新学習指導要領（2018）には、「外国語で表現し伝えるため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築する」ことも謳われている。「英語を使って何ができるようになるのか」ということを軸に、内容の中に現れる異文化理解の要素にも着目し深い学びにつないでいこうと試みている。本発表では、昨年度より、内容重視で英語教育に取り組んでいる佐世保市内の中学校における授業づくりの実践について報告する。

英語教育における日本語母語意識の気づきの重要性に関する一考察

—初級英語学習者の言語転移の克服に向けて—

橋尾晋平（同志社大学大学院博士後期課程）

英語の指導において、日本語と英語の表現や発想の違いを考慮することは非常に重要である。日本語は「主題—解説」の構造が基本である主題卓越言語とされるのに対し、英語は「主語—述語」の構造が基本である主語卓越言語とされる。この違いに基づいて、英語は語順によって意味が決まるのに対し、日本語は、助詞によって意味が決まると考えられている。この意味決定のプロセスの違いについて十分に理解できていない日本人初級英語学習者が正しい語順・構文で英文を産出することができない場面がしばしば観察されるため、英語のライティングやスピーキングなどの発信指導を行う際には、日英語の意味決定の違いはもっと強調される必要があると考えられる。

中学英語の検定教科書では、日英語の違いをあまり取り上げられておらず、また、「～は」・「～が」が主語にあたるなどという誤った説明がなされている。したがって、学習者の母語に精通する日本語ネイティブの英語教員が中心となって、学習者に日英語の違いを意識させながら、文を産出させる指導を行うことが必要となる。しかしながら、現行の大学における教員養成のカリキュラムにおいては、高度な英語運用能力に加えて、英語学や英米文学、異文化理解に関する知識・理解が重視されているため、日本人英語学習者に内在する無意識な母語の知識を体系化し、文産出に応用させることができる技能が醸成されづらい状況にあると懸念される。

本発表では、中等教育・高等教育機関で英語教育に携わっている英語ノンネイティブの日本人英語教員に対して、教員自身が日英語の違いについてどの程度理解できているかに関するアンケート調査を行い、ライティングやスピーキング活動において、学習者の英語の語順・構文に関する誤りをどの程度重要視しているのか、また、その認識が英語ネイティブの教員とどのような差を生じさせているのかについて検証する。

【主要参考文献】

橋尾晋平. (2019). 「大学生初級英語学習者の主語の習得に関する指導法の提案—主題標識「は」を含む助詞の意味に着目して—」同志社ことばの会記念論文集刊行会（編）『ことばとの対話—記述・理論・言語教育—』（pp.297-306）. 東京：英宝社.

宮田学. (2002). 『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ—』東京：大修館書店.

石田雅近・神保尚武・久村研・酒井志延(編). (2011). 『英語教師の成長—求められる専門性—』東京：大修館書店.

日本人英語学習者の母語に関する明示的知識の利用に関する考察
河内健志（高崎経済大学非常勤講師）・高橋栄作（高崎経済大学教授）

第二語習得研究において、語彙、音韻、文法、語用論、文化的知識など様々な要素が母語から目標言語へ転移することが、研究者間において程度の差異はあるが多く指摘されている（Ortega 2008, 白畑ほか 2010）。

日本人英語学習者に目を向けてみると、日本における多くの英語学習者は、ESL（English as a Second Language）環境ではなく、EFL（English as a Foreign Language）環境における外国語学習である。さらに、日本語と英語は言語間の距離が遠く、このことに起因して習得が容易ではないことは想像に難くない（Odlin1989, 白井 2008）。

最近の第二言語習得の研究では、外国語学習において学習者は、目標言語の運用能力が低くければ低いほど、母語の知識にアクセスし目標言語を運用する傾向にあることが指摘されている（Odlin 2003）。また、母語の言葉への気づきや言語の仕組み・規則などを意識化させるメタ言語能力が外国語学習にとって非常に有用であり、重要であることが指摘されている（大津・窪菌 2008、大津 2012, 2014、秋田他 2014）。このことから、外国語学習において学習者は、暗示的知識ではなく、意識化された母語の知識、明示的知識にアクセスすることが非常に重要であることが分かる。

そこで、本発表は日本語を母語とする大学生の英語学習者を対象とし、母語知識が利用可能、つまり、母語である日本語の知識が外国語学習に利用可能な明示的知識になっているかどうか、主語、目的語などの文法関係や格の機能に焦点を当てて明らかにする。また、項・付加部や意味役割といった基準で文中の要素を分類し、主題化した場合、どのような差異があるのか明らかにしていく。

【参考文献（一部）】

- 秋田喜代美、斎藤兆史、藤江康彦、藤森千尋、柗木貴之、王林鋒、三瓶ゆき、大井和彦（2014）「メタ文法能力育成をめざしたカリキュラム開発：実践と教材開発を通じたメタ文法カリキュラムの展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要 54』, pp.355-388.
- Odlin, Terence (2003) "Cross-linguistic influence. In C. Doughty & M. Long (Eds.), *Handbook on second language acquisition*, Oxford, UK: Blackwell, 436-486.
- Ortega, Lourdes (2008) *Understanding Second Language Acquisition*. New York: Routledge.
- 大津由紀雄・窪菌晴夫（2008）『ことばの力を育む』東京：慶應義塾大学出版会
- 白井恭弘（2008）『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』東京：岩波書店
- 白畑知彦、若林茂則、村野井 仁（2010）『詳説 第二言語習得研究—理論から研究法まで』東京：研究社

韓国人の人称表現使用に関する考察

— 家族関係を中心に —

小野遥香（同志社大学文化情報学部卒業生）

韓国社会において、昔から、儒教思想の影響によって、家族間の発話や人称表現の使用は話し手と聞き手の相対的な社会関係や年齢の上下関係を意識したものとされている。しかし、近年、時代の変化とともに、人間関係に対する考え方も変化しており、現代韓国人の言葉遣いや人称表現使用にもその変化が反映されていると考えられる。

チョン（2012）は、韓国の大学生へのアンケート調査より、昔よりも交流する親族の範囲が狭まっていることにともない、親族名称の使用範囲も狭くなって、昔ほど細かい使い分けをせずに親族以外の親しい関係の他人にも親族名称を頻繁に使用すると指摘している。現代の韓国社会において、親族名称の使用状況に変化が見られることは明らかである。

韓（2005）や小木（2016）は、韓国ドラマや日本のドラマを対象に、人称表現の使用状況について考察したが、その家族が属する家族階級には着目していなかった。財閥や会社の社長一族の家庭では、社会的に重要な役職や地位を担うため、上下関係を強く意識した発話が行われると考えられる。本発表では、家族階級に着目して、人称表現使用や言葉遣いに変化があるかについて、データ分析を通して明らかにする。

対象とするデータは、韓国ドラマの家族間会話のシナリオとし、先行研究より「昔のドラマ」「現代のドラマ」を設定し、それぞれの時代からドラマを選定した。

独自で設定した分析方法の整合性を確かめるため、予備調査を実施し、方法を再検討して、本調査を実施した。本調査で使用したデータは、昔のドラマ 1 作品、現代のドラマ 2 作品の合計 3 作品、約 22 時間分のうちの家族間シナリオである。方法として、ハンゲルで家族間の発話を抽出し、シナリオを「時代」「家族階級」「誰から誰への発話か」「言葉遣い（平常体／丁寧体）」に振り分け、クロス集計表を作成し、家族階級ごとに言葉遣いに変化があるかを調べるために、カイ二乗検定を行い、さらに、発話ペアによっても変化が見られるのかを明らかにするために、対応分析を行った。なお、本発表では、分析対象とする家族間の発話ペアを「親子」「夫婦」「兄弟姉妹」とし、有効データ 1328 を分析・考察した。

人称表現の使用状況を観察した結果、昔と現代で大きな変化は見られなかったが、先行研究により使用できないとされていた親族名称の使用が確認された。また、息子などに呼びかける際に、一人称複数形の「우리（私たち）」が使用されていることが確認された。これは、ウチソトを強く意識する韓国特有の使用であり、日本語の「うちの」に近い意味としても使用されていると考察した。言葉遣いにおいて、カイ二乗検定の結果、言葉遣いに関して、上流家庭では変化しておらず、一般家庭では変化していることが明らかになった。また、対応分析より、一般家庭の娘から母、娘から父、妻から夫の発話が丁寧体から平常体に変化しており、本研究の目的は達成されたと結論づけた。

副詞形「〇〇に」「〇〇的に」についての考察

陳志文（台湾・国立高雄大学教授）

筆者は近年「2字漢語」及び「副詞」を中心に研究を進めている。詳しくは陳(2012)(2014a)(2014b)(2015a)(2015b)などを参照されたい。以上の「2字漢語」「副詞」の研究に関連して、本研究ではいわゆる副詞形の「<2字漢語>に」と「<2字漢語>的に」との相違に着目する。例えば、以下の例を見てみよう。(Yahoo 検索)

- (1) 恐竜の王様ティラノサウルス・レックスは、広く一般に信じられているほど俊足ではなかったことが、コンピューター・モデルを使った最新の研究で明らかになった。
- (2) 感謝祭は、イギリスからマサチューセッツ州のプリマス植民地に移住したピルグリム・ファーザーズの最初の収穫を記念する行事であると一般的に信じられています。

例(1)～例(2)からわかるように「一般に」「一般的に」は同じく「信じられる」という動詞を連用修飾することができる。すなわち、現代日本語においては、連用修飾の場合、副詞形の「〇〇に」という形式と、「〇〇的に」という形式がほぼ同じ意味で用いられている。言い換えれば、この問題は、基本的には、副詞形「名詞+に」と「形容動詞「～的だ」の連用形」の異同の問題だと思われる。ただし、いったい、どのような場合にどちらを用いるのかという点は興味深い。本研究では、このような疑問を基に、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のコーパス資料を用いて「〇〇に+用言(述語節)」「〇〇的に+用言(述語節)」の具体例を抽出し、意味関係及び構造上の特徴などの要因からそれぞれの使用の実態を明らかにした。

【参考文献】

- 陳志文(2012)「漢語動名詞についての日中対照研究」『応用外語学報』第18期、国立高雄第一科技大学外語学院
- _____ (2014a)「日本語、韓国語及びベトナム語における2字漢語の基本語彙に関する研究」日本比較文化学会第36回全国大会(2014年6月14日)
- _____ (2014b)「『具体的+ N』と『具体的な+ N』についての考察—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における使用実態—」『国語学研究』53
- _____ (2015a)「副詞の『比較的』と『比較的に』についての考察—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における使用実態—」『国語学研究』54号
- _____ (2015b)「形容動詞連体形における『な／の』の選択条件について—『有名』『有限』『有数』の考察を中心として—」『日本語語彙へのアプローチ』おうふう

台湾における日本語とその表現文化の位相

—本土化を巡る機能をめぐって—

落合由治（台湾・淡江大学教授）

この発表では、日本語の各ジャンルの表現文化がそれぞれの異文化社会に受容される際にグローバル化での支配的言語とは異なる機能を果たしている点に注目して、台湾での事例を中心にそのグローバル的役割を考察する。台湾では、この20年間、「本土化」が台湾アイデンティティーに関する中心概念として機能してきたが、「本土化」には欧米、日本、中国大陸などの優位文化に対して台湾の固有性を見出そうとする志向と、政治的経済的軍事的な脅威になっている中国大陸の中華一元論に対して多様性を摸索する志向という二つの側面があり、この「本土化」の概念を用いると、中国の周縁独立国家・台湾の社会経済的動きを見るときに非常にその社会的特徴が理解できる¹。

台湾は歴史的に多重性多様性に富む多民族多言語社会で、常に外来の強国に侵略されつつ地域的独自性とアイデンティティーを保ち、現在は独自の多民族多文化併存の中、中国の妨害で大多数の国家と正式な外交関係を持っていない状況でも世界各国と交流し、経済面、技術面で独自の地位を維持している。グローバル化を進める中華圏、英語圏の言語・文化を制度・組織面では受容しながら、その一方で各家族や個人の生活面では日本語と日本文化を楽しむ等、支配的言語・文化と異なる選択肢を保ち、常に支配文化からの差延化をおこなって、深刻な国内での対立を回避しながら多様性を保つ動きを続けている。その「本土化」は、グローバル化の進行による深刻な経済格差の拡大により民族対立、異文化対立が世界各地に広がる現在、従来の支配被支配や多文化共生の構造とは異なる社会的動きを見せている。この発表では、以下の点を中心に現在の台湾で重要な社会意識機能を果たしている「本土化」と日本語とその表現文化の相互関係を考察し、多元的な文化位相を明らかにしていきたい。

- (1) 台湾社会での日本語と日本の現代表現文化の両義性
- (2) 台湾における欧米、中国大陸文化に対する日本語とその表現文化の位置
- (3) 差延化としての台湾社会のグローバル化戦略とその現代的意義

1 一例として、黄淑鈴(2017)「國族打造與國家品牌化：台灣觀光論述的本土化」『中華傳播學刊』第三十一期 pp.79-115 参照。

学生結社オルデンとドイツの学生歌の緊密な関係性

五十棲愛璃乃（京都外国語大学大学院博士後期課程）

ドイツとオーストリアを中心に存在する学生結社（Studentenverbinding）の酒宴やイベントにおいて、結社メンバーによるドイツ学生歌の合唱は中心的な役割を担っている。

16世紀の終わり頃から、学生同郷人会ランツマンシャフト（Landmannschaft）が主にドイツ語圏の各大学町に形成されていった。小国が分立していた当時のドイツの歴史的状況からも窺えるように、故国を離れ異国の大学で学ぶ学生たちは、その大学町において同郷地域出身者への支援を目的とした組織、学生同郷人会ランツマンシャフトを形成し、会員同士の友情関係を育んだ。

その後、18世紀後半のドイツに登場した学生結社オルデンは、1770年頃から急速に広がり、ほとんどのプロテスタントの大学町に浸透した。1771年にイェーナに創設された「アマツイステン・オルデン」を皮切りに、「ユニティステン・オルデン」、「コンスタンティステン・オルデン」、「ハルモニステン・オルデン」というオルデンの四大結社連盟が創設されるのである。

学生結社オルデンは、学生同郷人会ランツマンシャフトの掲げた相互扶助の精神を受け継いだ。さらに、会員同士の「生涯を通じた結合の原理」を取り入れることで、学生同郷人会ランツマンシャフトにおける、学生時代に限定された会員資格および、ランツマンシャフトの特徴である「地域主義の原理」を取り払った。学生たちがどの大学町においても学生結社オルデンの会員として活動できたことは、彼らが標榜するコスモポリタニズムの精神の表れといえよう。

18世紀は啓蒙の時代であり、プロイセンのフリードリヒ2世やオーストリアのヨーゼフ2世に代表される啓蒙絶対主義の政治が行われ、ヨーゼフ2世による寛容令や農民の解放令に代表される「上からの革命」は、この時代の成果といえる。旧来の伝統的権威を批判し、理性の啓発によって人間の進歩を促進した啓蒙思想は、学問の分野にとどまらず、芸術の振興、文化の発展につながった。

このような啓蒙主義の時代の要請として学生結社オルデンが生まれ、学生たちによって今もなお歌われている学生歌も生まれた。

この発表では、現在でも変わることなく歌い継がれているドイツの学生歌の多くの作品群の中から、人々の中に芽生えた「自由」へのあこがれ、情熱が頂点に達したフランス革命を経て、やがて訪れる祖国愛に満ちた時代につながっていくまでの時代である18世紀半ばから18世紀末頃につくられた学生歌にスポットを当てて、今日も学生たちに歌い継がれているこの時代の学生歌にみられる特徴を考察し、それらの学生歌が生まれるにいたった当時の時代背景、そして、学生歌と学生結社オルデンとの関係性について可能な限り明らかにしていきたい。

ドイツ語圏におけるフェミニズムの展開と決闘の衰退

菅野瑞治也（京都外国語大学教授）

産業革命などでいち早く社会の近代化を果たしたイギリス社会から、決闘の慣習は19世紀に入ると急速に衰退していくが、これとは対照的に19世紀のドイツ語圏においては、将校や学生のみならず、一般市民による決闘の数は増加の一途をたどった。この時代の決闘の本来の目的は、元来は騎士道精神に基づくものであり、男性が己の強さと勇気を証明することによって、自己の名誉と「男の体面・威厳」を守り、社会的信頼を勝ち取ることであった。決闘を行う者の自己意識の中には、「男らしさ」、「男としての自覚」、「男の誇り」といったものが絶えず潜在的に蠢いていた。それだけになおさらのこと、男たちにとって、「決闘」という男性だけの神聖な領域に女性たちが侵入してくることは絶対に許されないことであった。

ところが、19世紀後半になると、女性の権利を求めるフェミニズムがヨーロッパにおいても急速に広まり、それまでは男性的なものの象徴であった、タバコやズボンといった領域に浸潤し、それどころか男性の専門領域である決闘までを落手しそうな、因習にとらわれない自律的な女性たちは、男性の特権を深刻に脅かすものとして強く意識される存在となった。決闘は、男たちにとって、忍び寄る社会の「女性化」、「女性解放化」に対抗するためのまさに最後の砦であった。男性と同等の権利を要求する女性たちの声が強まる中、男性たちは、決闘という彼等だけの独占権を、言葉を尽くして死守しようと努めた。

女性の解放運動と、騎士道精神に基づく決闘との間には一つの根本的矛盾が存在していた。つまり、騎士道精神は、ある種の不平等さを、即ち、一方の側の弱さを前提としていたので、同じ権利と強さを持った者たちの間では存在し得なかったのである。事実、女性たちは、19世紀後半の時の経過とともに、強さと自律性を確実に獲得していき、女性たちの「保護者」として振る舞う余地を男性たちから急速に奪い取っていった

フェミニズムの発展によって、女性たちがこれまでの「女性的性格」という狭い境界線を踏み越えていくのに応じて、男性たちもまた、自らの自己意識を変革せざるを得なくなり、男らしさの象徴である決闘の慣習から次第に決別することを余儀なくされていったのである。決闘の慣習は、ドイツ帝国（1871-1918）末期においても依然として頻繁に行われていたが、男女の性における変化の兆しが既に顕著になりつつあったこともあり、間もなく衰退の一途を辿っていく。

この研究発表では、特に19世紀後半から20世紀前半にかけてのドイツ語圏の国々の市民社会にスポットを当て、フェミニズムの展開に伴い、それまでは男性だけの特権であった決闘がどのように衰退していったかというプロセスを概観し、当時の男性市民にとっての決闘の意義を可能な限り再考する。

樹木葬 NPO 法人エンディングセンター¹における墓友の事例研究

－「都市型ネットワーク」を通じた会員間の試み－

今野善伸（宇都宮大学大学院博士後期課程）

葬送領域では、1990年頃から「葬送の多様化」を求めるようになった。葬祭業者の商業化が拡大したこと、家族社会においては、残された家族が先祖の供養や祭祀の役割を果たさなくなった。決定的なことは、葬送から地域社会が手を引き、家族までが葬送領域から手を引くようになったこと、あるいは手を引かざるを得ない状況がうまれてきた。その論理は「死者の供養や祭祀を家族に委ねるべきではないという（家族に迷惑をかけたくない）」思いと、自己決定を何よりも尊重すべきという、個人化の論理が相まって展開されていった。このような現象は葬送に何をもたらしたか。日本型近代家族（家）の崩壊・少子化のなかで、祖先の祭祀供養を家族が引き受けるというシステムが困難になってきた。その結果、祭祀継承者（＝墓守）による継承を前提にしない新しい葬法が模索された。代表的なのが合葬式共同墓（納骨堂）、樹木葬、散骨である。

本発表では、樹木葬に参加する人々との対話からインフォマントのライフストーリーを把握するとともに（6人抽出）、その中から重要なキーワード「終末期医療における自己決定」「葬送スタイル（特に葬式）」「死生観＝生き方」などの論点に絞って、事例研究を行ったものである。一般的には、樹木葬を希望する一つとして自然に還る・土に還るという「自然回帰」だと考えられている。里山型樹木葬墓地の場合は、そうとも言える。しかし、都市型樹木葬墓地の場合は、異にする。ECは死後のネットワークをつくろうと活動してきた団体であるが、むしろ、生前の交流を通じて、共通の体験・学習を積むことによって死後の住処を共有する試みを展開していることが事例分析から得られたことである。生と死との共同性（墓友）の観点から考察したものである。

研究方法として、月1回開催する読書サークルに参加して会員の意識調査を行い、2016年から正会員になり内側の立場から問題を掘り下げて考察した。

【主要参考文献】

Boret, Sebastian (2016) *Japanese Tree Burial* (Japan Anthropology Workshop of Oxford)

井上治代 (2003) 『墓と家族の変容』、岩波書店

内田安紀 (2016) 「樹木葬墓地における「自然」の役割の変化」『宗教学・比較思想学論集』筑波大学

1 1990年7月「21世紀の結縁と墓を考える会（EN21）」を発足し、2000年EN21を発展解消し、「エンディングセンター」となる。桜葬墓地は東京都町田市、大阪府高槻市にある。

沖縄県大宜味村における神アサギの形態上の変化について

森下一成（東京未来大学准教授）

1. 本研究の目的

本研究の目的は、大宜味村における神アサギおよびその空間の変化を把握し、その意味を明らかにすることにある。

2. 研究の方法

文献調査および現地調査における実見・測量ヒアリングによる。本稿では現地調査についてのみ記載する。

(1) 実測

実見して建築意匠上の変化を見出し、さらに平面、立面について測量し、寸法体系についても把握する。1998年、2007年に採取した実測データがあるので、これとも比較する。

(2) ヒアリング

その地区の行政事務等を司る区長を対象とするヒアリングを実施する。その形態に現れる集落住民の意思を把握し、変化の意味を検討する際に用いる。

3. 調査結果・大宜味村の神アサギ

大宜味村には、大宜味、塩屋、白浜、屋古、田港、饒波、根路銘、田嘉里、謝名城、津波の11集落に神アサギとその空間が認められる。

このうち、根路銘については、神アサギは消失したが神アサギ空間は残され、その地に公民館を擁する公共空間を維持している。上記以外の集落では喜如嘉と大兼久に神アサギ空間があり、神アサギも設置されていたが、建物も空間も消失した。喜如嘉のその空間は駐車場となり、「神アサギ跡」という標識が設置されていた。

4. 近年の形態の変化

近年、建て替えなどで大きな変化があったのは、津波、田嘉里の神アサギである。また、建て替えがあったにもかかわらず謝名城の神アサギにはその形態に変化がなかった。また、琉球処分まで辿れば、根路銘、喜如嘉、大兼久の神アサギとその空間に変化が生じるのがその時期なので、これらの集落のケースも考察対象とすれば、隣村である国頭村の神アサギをテーマとした拙稿で指摘したエスニシティについても検討の射程となる。本研究ではこれらの神アサギを主たる対象として考察する。

5. 今後の課題として

すでにまとめた隣村である国頭村の神アサギとの比較考察を要するので、2018年以降の国頭村の神アサギの変化についてフェロー調査を要することになる。

【参考文献】

池浩三『祭儀の空間』1972

森下・福島「沖縄島における神アサギ・トゥンの分布と類型及び同一性に関する研究：神アサギ・トゥンに関する研究 その1」日本建築学会計画系 2005

茶の湯における「見立て」の手法とコミュニケーション

白須洋子（横浜商科大学特任講師）

茶の湯は、長い伝統を持ち、日本人の茶を楽しみ、客をもてなす一連の静謐な作法として知られている。従来、茶の湯の美学や精神性、また茶室建築などに関する研究はこれまでも多くみられるが、しかし、茶の湯のコミュニケーションの側面を調査する研究は少ないようである。本発表ではまず茶の湯の歴史とその総合的な芸術としての独自性について簡単に紹介し、主人と客は礼儀や感情を交換する過程や、もてなしと芸術的な知性を表すものとしての道具立てに言及する。次に、これまでの研究を参考にしてコミュニケーションを定義する。茶の湯における「見立て」の手法によるコミュニケーションを通して、茶の湯が、主催者とゲストによる相互活動であり感情と知識を共有する場であることを示す。あるものを別のものに「見立て」という行為は日本人の独特の感性によるものである。道具を本来の用途とは別の用途に使うことに焦点を当てて、茶の湯における主人と客のコミュニケーションについて議論するとともに、「見立て」が日本人の考え方に与えてきた影響を探っていく。

茶書にみる茶道における人間形成

—「形のない文化」と「型」—

松本きみゑ（大阪大学大学院博士後期課程）

茶書の原点となる、『山上宗二記』は利休の絶頂期に弟子の山上宗二（1544～1590）が「宗易先達なり。右の尊師に二十余年、侯蜜伝、これを書き改め」その奥義を究め、著述した茶道秘伝書であり、利休茶湯研究資料の最もすぐれているものである。また、利休の求めた本当の姿を知ることができ、さらに、この茶書には人間形成の道に通ずる、遊芸からは程遠い精神的な働きを重視する草庵茶道の理論が完成したことが記されている。

茶道には「道」という字があり、儒教における人倫道徳には、道を明確にするという孔子の教えがある。『山上宗二記』には、「孔子聖人の道も学び」とあり、孔子の教えを随所に見出す。茶道は、型の教育である。「型とは、伝統の客観化された集積である」。茶道文化が大衆化した現状では、名人の師の演技には接し難いものである。そのために、古人の高度な技芸の極致を「型」として形式化したのである。

茶道の精神を身につけるために「型」・「行」・「心」の三つの視点を設定し、考察した結果、『山上宗二記』において、「茶湯には習骨法晋法度。第一」を基本とし、「僧の行いを専らにす」、「是に心を懸くれば、悉く下手の名を取るべし。」と『論語』においては、「礼」、「本を務む。本立ちて道生ず」、「其れ仁の本為る」とある。茶道には「型」・「行」・「心」の三つの観点が必要不可欠であることが明らかになった。

結論として、『山上宗二記』の中で宗二自身が「惣別、茶湯には、昔より以来、書物は無し。ただ古唐物を多く見て、上手の茶湯者と節々参会をなし、作分出だし、昼夜茶湯に数寄覚語、これ師匠なり。この書物は初心の為には重宝の第一なり。数寄者の為には入らざる者か。古語にいわく、修多羅教刺月指、文字之言句敲門瓦子」とあるように、教えというものは、形にあらわれた現象を、一つの手がかりとして指し示すのみであって、その奥に潜む真実に対しては自分の力で迫っていかなければならない。文字に記された一つ一つの言葉も、そのための方法であると解き明かしている。究極は「七十にして心の発する処に従いて矩を越えず」の境地に孔子も利休も辿り着くことができたのである。利休の茶の湯の本意は、儒教の根本精神で茶道の根本理を示したものとして特筆に値する。

西田幾多郎全集九巻「日本文化の問題 付録 学問的方法」で「形なき形を表現するとも云ふべき東洋芸術の根底には、……更に一層深き何ものかがあるのではなからうか。」「無論、我々が我々の文化を明らかにするには、我国の歴史について、我々の歴史的な文化を研究せなければならぬ、徹底的に学問的に研究せなければならぬ。そしてそれが我々の考の基となるであらうことは云ふまでもない」とある。

本稿では、西田のいう「形のない文化」と利休のいう「型」を明らかにすることを目的とする。

多文化社会における高度人材の獲得
—九州における留学生と企業をつなぐ事例研究から—
郭潔蓉（東京未来大学教授）

日本社会は日々多様化し、事業の現場ではグローバル人材の必要性が高まっている。こうした産業界からの声を受け、日本政府も平成24年5月7日に「高度人材ポイント制による入国管理上の優遇制度」の導入に踏み切った。この制度の導入により、いわゆる高度人材が行うとされる「高度学術研究活動」、「高度専門・技術活動」、「高度経営・管理活動」の三分野において、それぞれの特性に応じて、学歴・職歴・年収などの項目ごとにポイントを設け、ポイントの合計が70点に達した「高度人材」とみなされる者に対して、出入国管理上の優遇措置を与えることにより、高度外国人材の受け入れ促進を図るという制度が稼働するようになった。同制度の導入により、複合的な在留活動の許容や在留期間の長期化、在留歴による永住許可要件の緩和などの優遇措置が図られるようになり、高度外国人材にとっては、日本での活動が大幅にしやすくなった。こうした法的措置の緩和により、より多くの外国人が日本社会で活躍するようになったことは間違いない。

一見すると多くの企業がこの措置により、多くの優秀な外国人材を獲得できるようになったかのように感じるが、取材などを通してみると、実際のところグローバル人材の獲得に苦慮している企業は少ないことに驚かされる。そうした企業の声に耳を傾けてみると、「どのようにして高度外国人材に接触するのか、その方法が分からない」や「自分たちの企業とマッチする外国人材を探すことが難しい」といった意見が多く聞かれた。

こうした事態を打開すべく、各自治体が地元への高度人材誘致も見据えて、様々な施策に乗り出している。その中でも九州地区で実践されているウェブサイトを活用した「人材マッチングサイト」事業は、地元の留学生と企業をつなぐ新たなパイプ役として注目を浴びている。

JASSOの調査によると、留学生総数のうち約70.5%の18万8,304人が高等教育機関に在籍をしている。各学種課程を修了して卒業をする留学生の総数は、直近の数字で48,598名おり、中で最も卒業生が多いのが4年制大学の12,523名である。そのうちの約49.8%が就職をしているという調査結果が出ているが、大変残念なのは、彼らの進路先が全て日本ではないという点である。内訳をみると、就職先を日本と選択をしたのは41.8%で、出身国へ帰国して就職をする割合が7.8%、日本でも出身国でもない第三国へ就職をする割合が0.2%となっている。日本で育てた高度人材が海外へ流出してしまうのは、日本社会にとって本意なことではないだろうか。

このような背景から、九州地区での取り組みは社会的にも意義があると考えられる。因って本発表は、インタビュー調査を通して、九州地区での取り組みの実態を明らかにし、多文化社会における高度人材の獲得競争の観点からその効果と課題を検証したい。

海外短期英語研修が学生に及ぼす影響に関する一考察

東本裕子（横浜商科大学准教授）・白須洋子（横浜商科大学特任講師）

海外英語研修は学生の語学力やコミュニケーション能力を向上させる効果が高いと言われる、近年多数の大学で様々な語学研修プログラムが提供されている。横浜商科大学では長期の交換留学プログラムに並行し、海外協定校の一つであるアメリカのピッツバーグ大学ブラッドフォード校にて毎年夏期休暇期間を利用し2週間ほどの英語研修を実施している。このプログラムは選択科目の一つであり、1セメスターの週1回の事前授業×15週とアメリカにおける2週間の現地研修を合わせ、1つの履修科目「異文化交流と国際理解」として位置付けられている。

今回著者の1名はその科目を担当し、事前講義を行うと共に現地研修に引率教員として同行した中で、2週間という短い研修でありながらプログラムに参加した学生の様子に研修の前後で大きな変化があることを観察した。参加した14名の学生の英語レベルは多様であるが、全員に共通して見られた現象として、英語を使用してネイティブスピーカーと話す際に、日本語を使用して話している際に比べ明るく積極的且つ社交的な様子が見られた。全員の学生が、研修に参加することで自信が付き、自己肯定感が高くなったと感じていたことも興味深い。

これまで本学では参加学生に対して類似の調査が行われたことはなかったが、今回研修出発前の日本における事前の15回にわたる準備授業も含め、このプログラムに参加することにより学生の英語学習に対する意欲や英語を使用したコミュニケーションに対する気持ちにどのような変化があったかをアンケートやインタビューの形式で調査を行い纏めた。また実際の英語力の変化を見るために、現地研修参加前後に行ったVELCテストの結果から、学生の英語力がどのように伸びたかを、ReadingとListeningの両面から分析した。英語力の伸び率が高かった学生、低かった学生の背景を探り、次年度の同プログラムの内容改善、また通常の英語授業の内容改善に役立てたい。

多言語・多文化共生台湾におけるアイデンティティ
頼錦雀（台湾・東呉大学教授）

2015年、台湾出身の東山彰良と温又柔は多言語表記による作品で日本で受賞した。東山彰良は『流』で第153回直木三十五賞を、温又柔は『台湾生まれ 日本語育ち』で第64回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した。その多言語表記の例を見てみよう。

- (1) とにかく、その^{売国奴}漢奸の手引きでたくさんの村がつぶされた。（東山彰良『流』p.35）
- (2) そもそも孫のまえで馬脚をあらわすはずがないし、あんたのおじいちゃんは^{プレイボーイ}花花公子よ、と女たちに意味ありげな含み笑いを添えて言われたことも一度ならずある。（東山彰良『流』p.45）
- (3) ^{ママ}媽媽には日本人の^{かれし}男朋友がいたの？（温又柔『空』p.76）
- (4) あのひとはどうなるの？ ^{にいさん}アヒア、あたしはどうしたらいい？……（温又柔『空』p.48）

(1)～(4)は日本語作品における多言語の表現である。「^{売国奴}漢奸」「^{プレイボーイ}花花公子」「^{ママ}媽媽」「^{かれし}男朋友」は中国語で、「アヒア」は閩南語である。このような多言語で綴られ、多文化が記述された作品は面白い、と日本人に評価され、受賞したと思われる。しかし、作者の東山彰良と温又柔の出身地である台湾ではこの多言語という事実によってどのような戦いが起こったのか、多言語・多文化の台湾にいる人々はどのようなアイデンティティをもっているのか、日本人の方々にはあまり知られなかったのではないだろうか。

本発表では多言語・多文化共生台湾におけるアイデンティティについて述べたいものである。台湾人のアイデンティティ意識の強さに比べて、日本にいる日本人の方々にはアイデンティティ意識が希薄かもしれない。一方、一口に台湾人と言っても人によってアイデンティティが違っている。日台交流の視点から見れば、異文化交流の現場においてこのような違いが時には異文化理解の壁になり、カルチャーショックを起こしかねるかもしれない。

グローバル化によって国の独自性が消え、アイデンティティ・クライシスが起きてしまう心配もあるが、多言語・多文化の現象が起き、言語生活の内容がもっと充実するようになる。このような世界の趨勢の中、各社会の古くから持っている言語・文化をもっと大事にすべきである。そして、多言語・多文化が存在する社会における共生を目指すのは理想的なことであるが、そのゴールに辿るまでの道程は平穏なものではない。まず、各言語・各文化を平等に扱うのが基本的な態度である。勿論、科学技術の進歩によって翻訳機器が普及しているが、しかし、直に生な言語で交流してこそ真の人間同士の意思疎通ができるので、皆に複言語を身に付けるのが望ましいことである。

現在、台湾の一部の交通機関における車内放送では中国語、閩南語、客家語、英語、日本語が聞こえるが、書き言葉では昔からの差別言語政策によって中国語以外の台湾の言語を文字で記されることが難しいことになっている。いつか、台湾出身の東山彰良や温又柔のように、自分の考えたことを多言語で記述できるようにように庶幾する。

キーワード：多言語・多文化共生、台湾、言語政策、アイデンティティ、異文化理解

宮脇俊三『台湾鉄道千公里』に見る異文化理解と紹介の方法
邱若山（台湾・静宜大学教授）

宮脇俊三は昭和 55（1980）年 6 月 2 日から 6 月 8 日にかけて一週間の台湾一周の旅をした。昭和 52 年中央公論編集長を退任後、マスコミの話題になった『時刻表 2 万キロ』（同年 7 月）を出版し、『時刻表昭和史』（昭和 55 年 7 月）の出版の前に行われた、宮脇の最初の海外取材旅行であった。その紀行である『台湾鉄道千公里』は、その年の 12 月に単行本になり、宮脇鉄道文学の名作の一冊に数えられている。〈鉄道ものとしてだけでなく一九八〇年代初頭の台湾社会見聞記として生彩を放っている〉と評価されている。

1980 年代の台湾は「戦時体制下」で戒厳令が敷かれていた。宮脇は鉄道を見る目で、克明に、戒厳令下の台湾の姿を捕らえた。そして、彼なりに台湾の事情を汲んでいて十分の理解と同情を示していた。

〈台湾の地理は地文、人文とともに日本によく似ている。鉄道自体も日本が敷設したものである。〉と宮脇は観察している。宮脇は、台湾の鉄道事情や風景を描写するとき、よく日本の鉄道事情を引き合わせて説明する。台湾鉄道の経営が日本と同様の苦境に陥っている、台北駅が上野駅に似ている、台南駅の第一月台で〈京都駅の 1 番線に立った錯覚を感じる〉、基隆駅の構内を見て門司港駅を思い出した、阿里山鉄道の上りの後押しが信越本線の碓氷峠と同じ、宜蘭線の三貂嶺が山陰本線の保津峡駅を連想させる、対号特快列車が〈日本製なのだ〉、ローカル線の風景や乗客などが〈日本のローカル線によく似ている〉、などのような描写を通して日本の読者にイメージ作りのよすがや親近感を持たせる。

沢山の駅で、日本語で話しかけてくれた駅員や駅長、助役に出会い、親しく会話を交わし睦まじく交流をした。宮脇は〈台湾を旅行していると〉、〈昭和三〇年代半ばごろの日本にいるような気がしてならない。〉と実感していた。

北港駅で横に坐った〈見すばらしいおっさん〉に「今上天皇、マダ生キテルカ」と聞かれた。宮脇は日本と台湾の戦前の繋がり、戦後の断絶、そして断ち切れない関係を物語った一場面を描いている。作品の中で、台湾人が喋った日本語はカタカナによって表記されている。宮脇は台湾で、行き着く先々で日本語で話してくれる人々に出会った。様々な場面で色んな気持ちで語ってきた台湾人の日本語を、宮脇はカタカナ表記で精妙に描いた。

また、〈台湾の標準語とされている〉北京語で「再見ツァイチェン」と言った宮脇に平溪線の青年が「再会ツァイホエイ」、台東線のおっさんが「さよなら」と返答した。宮脇は台湾における言語表現によるアイデンティティの違いを感得したのである。

本稿では、『台湾鉄道千公里』における宮脇俊三の台湾の異文化に対する理解と紹介の方法を究明する所存である。

キーワード：宮脇俊三、台湾鉄道、日本語、中国語、台湾語

セネガル・ダカールにおける民衆の思考法と日常生活上の価値観
—マンガ“Goorgoorlou”から読み解く生活規範と“夫と妻”—
鈴井宣行（創価大学教授）

セネガル民衆の生活を考える時、厳しい状況の中であって、どこまでも「笑顔」を絶やさず、それぞれが有していないものを互いに補完し合いながら、生活を営んでいる状況を目の当たりにすることが多々ある。発表者はダカールでの通算約3年（長期は大使館勤務の2年間と在外研究での6か月、ほかに2年乃至3年に一度、1か月間の調査滞在）に及ぶ生活実体験を通して、貧困、あるいは極貧の中で生活を営んでいる彼らから何故「笑顔」が失せないのか、また、彼らが日常どのような考えに基づいて、厳しい生活環境の中を突き進んでいるのかを常に問い続けている。そして、見えてきたのが三つのキー・ワードである。まず、伝統的な思想である(1)“Téranga”。これはセネガルを少しでも研究し、理解している人ならば、すぐにわかるであろう。つぎに、この思想がさらに重要だと考える。それは(2)“Goorgoorlouisme”というものである。さらに、もう一つ、人間関係を結び結びつけている(3)“Long bras”というものである。民衆の中に流れるこの三つの思想を基盤に持ち、風刺的要素を多分に含んだマンガがある。それはT.T.FONS著“Goorgoorlou”である。今回の発表では、この“Goorgoorlou”シリーズの中から数編の *épisodes* を取り上げ、彼ら民衆—ことに、夫婦間—の日常生活に垣間見られる民衆思想を通して、活気ある「人間」生活を見ていく。

実写版ドラマ“Goorgoorlou”は、RTS（セネガル・ラジオ・テレビ）放送で絶大なる人気を博したテレビ番組であった。この非常に人気の高い番組は、国立ダニエル・ソラノ劇場所属の俳優アビブ・ディオップ(Habib DIOP)と女優スヌ・セーヌ(Seune SENE)というセネガル喜劇界最高峰の二人の俳優によって演じられた喜劇ドラマである。この番組は、IMFによる構造調整下のセネガル・ダカールで日常生活の困難さの中で懸命に生きていこうとする民衆の姿を悲喜こもごものストーリーを描いたものである。

上述した3つの言葉がセネガルの人々の生活に如何に大きな影響を与えているか、セネガル独自のイスラム教であるMouridesの思想（＝創始者アマドゥ・バンバが唱えた思想とも言える）と併せて考察し、セネガルの民衆の精神的奥底を明らかにしていこうと思う。

一国の、それもアフリカ・セネガルの価値観を探るこの作業はかなりの困難を伴うのは明らかであるが、これをしっかりと把握しない限り、持続的開発、あるいはそれに関わる開発計画などもセネガル民衆の立場に立った、真の意味での開発援助にはなり得ないと考えている。つまり、セネガルの民衆が如何なる思考方法を有し、それを日常の生活の中で如何に活かして、活着しているのかを知らなければならないと筆者は考えている。先進国からセネガルに来た人々は異口同音に「セネガル人は時間にいい加減だ」とか、「やる仕事がいい加減だ」とか、「時間的な約束は守らない」などと言う。しかしながら、彼らの立場から言えば、これは至極当然な行動であり、別段不可思議なことではない。先進国の人々が前述のようなことを述べるのは、彼らの価値観から見ているのであり、セネガル人の有する価値観で見ているわけではない（傍点筆者）からである。この点にこそ、両者の間に大きな溝を作る最大の原因が存在しているのである。それ故、この部分をしっかりと認識しておかなければならない。

最初に述べたように、本発表では、マンガ“Goorgoorlou”から取り上げた数編の *épisodes* の中に描かれた場面のGOOR(ゴール)とDIEK(ジャック)夫妻が交わす言語表現分析を行いながら、庶民生活の中で上記の3つの思想(Téranga, Goorgoorlouisme, Long bras)が日常の場面(仕事面、あるいは人間の付き合いなど)でどのように捉えられているのかを考察し、「貧困の中の「豊かさ」という極めて逆説的な心理状況の中でこれらの「思考」が人々を活気づけているのは何故か、その因を探ろうとする試みである。

The Orientation of Asia Festival :

Solar Terms, Folk Custom, Culture Tradition, and Literature
JI-XIANG, YANG (National Sun Yat-sen University, Taiwan)

The construction of the study and understanding of “culture” must begin from a place of human empathy (仁愛), with an appreciation of the value of the human emerging as the highest goal of advanced university education.

“Culture” has plural origins, and its transmission can be understood as perpetually moving from a central region towards peripheral regions. As peripheral regions absorb this culture, they too will slowly develop a sense of “cultural self-consciousness,” and develop a culture imbued with their own characteristics.

The “renaissance of the humanities” in 21st century Asia is a cultural phenomenon that is critically important for the mutual co-existence of not only different societies and cultures within Asia, but indeed between the larger Eastern and Western worlds as well. If we look back at the Western Renaissance, it emerged out of a process of “self-consciousness, mediation, and creation.” While the Western world, having experienced the Renaissance, had made tremendous historical progress, its worldview also produced a tremendous sense of opposition between religions, peoples, and nations, which emerged into outright conflict and war. A stark contrast can be made with the Eastern world’s “Asian community,” which had at its heart the “Sinographic Cultural Sphere” and the “Confucian Cultural Sphere.” The “Asian Community consistently championed the integration, harmony, and co-existence of different cultures. Asia is at this very moment leading a new “cultural renaissance,” using the concept of “Asian Community” as both its starting point and goal. This renaissance not only seeks to create a robust and dynamic intellectual, artistic, and media culture for twenty-first century Asia, but in doing ensure that Asian models of cultural innovation and integration are recognized not simply throughout the region but indeed throughout the world.

According to the field work about Asia festival, we will find the orientation of Human, the value of the Human, that is, we will find what the ending purpose of Education is.

最新書簡集 2 冊に見る詩人 Sylvia Plath の素顔と仮面
上杉裕子（呉工業高等専門学校准教授）

アメリカ詩人 Sylvia Plath は、30 年という短い生涯の中で、200 編を超える詩のほかにラジオ劇、子供向けの本、短編・中編小説、日記、回想録、家族や友人らに宛てた大量の手紙を残した。

2017 年、彼女が 1940 年から 1956 年にかけて書いた手紙を集めた書簡集 *The Letters of Sylvia Plath, Volume 1: 1940-1956* が衝撃的に出版された。書簡集は 1940 年、プラスが 8 歳のときに両親に宛てたメモ書きから始まり、ボストン郊外ウェルズリーでの少女時代、スミスカレッジでの勉強の様子がそれに続く。しかしながら、亡き父はプラスの手紙にほとんど登場していないのは驚きである。政治、文学、自身の学業や恋愛、そして自由奔放な文学への野望とそのためのプラン、自殺未遂など、多岐にわたる話題が取り上げられた書簡集からは彼女の生き様がうかがえる。この書簡集の出版を記念して、2017 年 11 月、アイルランドで世界から著名な研究者たちが集う国際学会が開催され、活発な議論が交わされた。

その翌年の 2018 年には、続編第 2 巻となる書簡集 *The Letters of Sylvia Plath, Volume 2: 1956-1963* が出版された。第 1 巻ではごく普通の愛らしく少女らしい快活なプラス像が多く見られたが、第 2 巻はこれまで現存しないとされていた精神科医に向けて書いた手紙、ヒューズとの関係の悪化や創作の行き詰まりなど、死の直前に至るまでの詩人の赤裸々な素顔を見ることが出来る貴重な書簡集である。

娘 Frieda Hughes は 2 冊の書簡集冒頭において、母への想い、母の創作の可能性について語っている。これら 2 冊の書簡集を読み、詩人プラスの素顔に迫り、その過程の中で浮き彫りになる偽りの仮面 *false masks* の登場についても指摘、分析し、それらが彼女の作品にいかなる影響を及ぼしているか、作品と書簡集を横断しながら考察する。

「老い」を転覆させる：

Margaret Drabble の *The Dark Flood Rises* における終わらない生

原田寛子（福岡工業大学准教授）

本発表では、現代イギリス作家マーガレット・ドラブル（Margaret Drabble, 1939- ）の小説 *The Dark Flood Rises* (2017) を取り上げ、この小説が「老い」をどのように描き、どのように「老い」や「死」という問題を表しているかを考察する。

ドラブルは1963年のデビュー以来、ほとんどの作品において作者と同時代に生きる同年代の女性を描いてきた。出版当時70代後半であった作者が「老い」をテーマに70代の主人公フランチェスカと同世代の老人たちを取り巻く世界を描くことは不思議なことではない。登場人物たちは、主人公と同世代の人々であり、全員が少なからず自らの「老い」を意識している。小説の中では二人の主要な登場人物が亡くなり、後日談ではフランチェスカを含むほとんどの老人たちが亡くなったことが告げられる。この小説は、まさに人生の終盤を生きる人々の「老い」と「死」を描く物語である。

ボーヴォワールによれば、「大多数の人間は老いを悲しみ、あるいは怒りをもって迎え、「老いは死よりも嫌悪の情を起こさせる」ものである。また、若年期に経験する「大人になったらどうなる」という自己探求と違って、「年を取ってもこのままでいられるのか」という「新しいアンデンティティ・クライシス」を生じさせる「老い」は、年齢を重ね衰え変わりゆく自分に生じる「内なる他者」を受け入れることにつながるとデファルコは述べる。そして、「老い」と切り離せない次の段階はまぎれもなく「死」である。人生の終焉という先延ばしにしたいと誰もが感じる現象も含め、「老い」には悲劇的、否定的な要素が付きまとう。

しかしながら、*The Dark Flood Rises* は、老人たちを描き「老い」や「死」というテーマを取り上げながらも、巧妙にその悲劇的な側面を覆している。本発表では、まず、主にフランチェスカが「老い」と折り合いをつけていく過程を考察しながら、「老い」や「死」と向き合い、前向きに受け入れていく登場人物たちを分析する。そして、登場人物の「死」との関わり合いとプロットの展開を通じて、ドラブルがいかに「老い」や「死」の否定的な面を巧妙に避けているかを論じる。最後に、「老い」とは必ずしも、「死」に連なる悲劇的で特別な時期ではなく、生の時間軸の一時点であり、次の生に関わり続いていくという、この物語が提示する前向きな「老い」の位置づけを確認したい。

ブリュッゲルの『ゴルゴタの丘への行進』
—フーコーの指摘する「癪者のまなざし」との関連において—
藤倉恵子（京都産業大学名誉教授）

16世紀フランドルの画家のなかでも、ピーテル・ブリュッゲル、そして、彼の作品のなかでもキリストの磔刑にまつわるテーマのひとつを描いた『ゴルゴタの丘への行進』の細部の象徴性の分析は、しばしば、美術評論の対象となってきた。そして、磔刑への嘆きが画家の故郷フランドルの運命に重ねられたとする解釈は、しばしば指摘されてきた。しかし、フーコーがその著『狂気の歴史』において、この絵に言及し、そこに癪者の姿を見うるかのように述べていることについては、これまで検討されたことはなかった。では、画布のどこに癪者を認めうるのか。手がかりをどこに見いだせばいいのだろうか。

ブリュッゲルのこの絵の構図に、フランドルの先輩画家、ボスやウエイデンの引用が果たした役割をあらためて考察する必要があるだろう。また、ブリュッゲル自身の作品間の一種の相互テキスト関連性も注目される。画家が絵にタイトルを付すことのまだなかった時代に、ブリュッゲルは、500人を描きこんだ画布のなかに、特定の人物を確実に提示するとともに、特定されない謎の人物たちに注意喚起を行っているのである。そこから、あぶり出される人物たちのなかにこそ、癪者の存在が推測されるのである。この絵には、ブリュッゲルの時代とキリストの時代が混在しているとされるが、さらには、癪者が社会からうち捨てられていた時代をも描いていることに気づくのである。

フーコーが西欧中世における最後にして最大の癪病の流行とその終息を語りながら、なぜか、抜け落ちている癪者とユダヤ人に対する虐殺事件と、その伏線となったであろう、1世紀は溯ってのキリスト教会の差別的決定の内容について、フーコー以前の19世紀のミシュレおよび20世紀のポリアコフ、そして、フーコー没後、癪者にあてがわれた服の色まで初めて明らかにしたギンズブルグを参照する必要があるだろう。

ブリュッゲルのこの絵は、「北方ルネサンス」の画家たちにおける、ファン・エイクに始まる「風景を眺める人物像」の系譜に連なる面をもっているが、眺める行為や風景の意味よりも、何に背をむけて景色を見ているかに、宗教的後退性の増大を見るべきであり、ブリュッゲルがこの絵に癪者を描き混んだ意味にも関わることになるだろう。

デジタルアリス

堀秀暢（津山高等工業専門学校非常勤講師）

ルイス・キャロル（Lewis Carroll, 1832-1898）は、写真やフィルム、レコードといったメディアの時代を生きた人間である。こうしたメディアは現代ではアナログメディアと呼ばれる。アナログとは、数値を連続的に変化する物理量で表すものであり、0と1を使用する二進数を扱うデジタルメディアと対比の関係にある。

キャロル作品を視覚的側面や、数学的側面から分析したものは存在しているが、現代メディアの視点が欠落している可能性がある。本発表は、アナログ時代における彼の先進的思考や感覚の表れ、つまり現代人に近い発想を、キャロルの作品『不思議の国のアリス』（*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865）および『鏡の国のアリス』（*Through the Looking-Glass: And What Alice Found There*, 1871）を中心に読み解くことを目的とする。

キャロルは数学者や論理学者、作家といった多数の肩書きを持つ。そして、その中にアマチュア写真家といった一面も存在している。写真撮影は、当時では最新の記録メディアであり、現在でも、彼の撮影した写真は数多く現存している。また、コーエン（Morton N. Cohen）の分析によると、キャロルは機械好きであったということが明らかとなっている。当時最新の記録メディアであったカメラはもちろんのこと、蓄音機にも関心を寄せており、ロンドンの博覧会を訪れ、そこに展示されていた「エジソンの蓄音機」を二度にわたって体験している。その際に、「50年先まで生きて蓄音機の完全な姿を見ることができないことが残念である」といったコメントも残している。

こうした事実から、写真という記録して「見る」ための道具と、蓄音機という記録して「聴く」ための道具といった、人間の感覚に働きかける装置に対して、キャロルがことさらに魅力を感じていたことは明らかであろう。彼が文学作品執筆をおこなっていた期間からややあとの1895年に、世界初の映画とされる『工場の出口』が上映された。キャロルの趣味嗜好や先見性を考慮すると、映画のような記録動画的発想も持ちえたのではないだろうか。

キャロルが“数字 (digit)”を扱う学者であったということと、当時の最新のメディアを使いこなし、かつ、未来のことを思い浮かべるような側面を持っていたという二点を考慮すると、キャロルの文学作品を現代的な視点より分析する必要性が生じているのではないだろうか。彼の表現したかったもの、あるいは表現しえたものは、「文学の領域を超えた何か」だったのではないか。現代的な視点をを用いて、キャロルの作品における未来的嗜好や先進的発想を明らかにする。

鎌倉時代の匙の文化史に関する一考察

—『厨事類記』を中心に—

都基弘（韓国・Hanbat 大学教授、

早稲田大学・博報財団 第十三回「国際日本研究フェローシップ」招聘研究者）

「大饗」という宴会において匙が使われていたことは、平安時代の『類聚雜要抄』などの有職故実書において確認することができる。このような匙の文化は「民衆のあいだまで匙が浸透した形跡はなさそうである。貴族社会の崩壊とともに匙は忘れ去られてしまい、明治時代になって、鍋物の流行とともに散蓮華が使われるようになったのである。」⁽¹⁾という。

しかし、「平安末期から鎌倉期末にかけての食饌の旧儀故実を伝えた好著。」⁽²⁾と言われている『厨事類記』は、匙の図をはじめ、配膳図における匙の記載、匙の寸法など、匙に関するたくさんの資料を擁しており、「貴族社会の崩壊とともに匙は忘れ去られて」しまったとは言いがたい。

本発表では、上記のような『厨事類記』における「匙」の記録を検討し、「鎌倉時代の匙の文化史」の一端を提示したい。

*本研究は、博報財団 第十三回「国際日本研究フェローシップ」の助成を受けて行われたものであり、ここに謹んで感謝の意を添える。

(1) 石毛直道 (1983) 『食事の文明論』中央公論社. pp. 125-126.

(2) 日本大百科全書 (ニッポニカ) <https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000151831> (2018年10月26日検索) 成立に関しては「文中に永仁3年(1295)の記事があり、そのころの本らしい。」という。

『破戒』から『春』にいたる道
林盛奎（韓国・白石大学校教授）

藤村は『破戒』の執筆中に第二の長編『春』の構想が沸き上がって来た。確かに『春』は『破戒』の同一線上に生まれた作品にはかならない。藤村は丑松に託して「自我の青春を、いひかへれば時代の抑圧と硬塞のもとに早く目覚めたための苦しみを苦しんだ自己の姿を改めて再認識しよう」とし、『春』の岸本に「自己の青春のなかにあつた近代を確認する試み」をしている。

藤村は明治二七年夏頃（二三歳）、ドストエフスキーの「罪と罰」とルソーの「懺悔録」を読んで深く感化される。藤村におけるルソーの意義は、藤村自身と近代精神の本質についての認識を目覚めさせたことである。二三歳頃の藤村と言えば、佐藤輔子への恋から関西への傷心の旅を経て〈恋愛の重荷〉から逃れている時期である。そのかわりに〈生活の重荷〉にあえぐことになる。弱い人たちの運命を一身に背負うことになったからである。自分自身の道もいまだ定まらず、放浪する。私生活の諸々の問題を抱えつつあつたのが、ちょうどこの『春』の頃であつた。

『破戒』を書いて、大きな反響を起こした藤村は、『春』『家』『新生』と自伝的な告白小説を次々に発表する。しかし、『破戒』から『春』に到る間は、日本の自然主義文学が辿る道程とは、大きな相違が生じている。これらの相違というものは、『破戒』は被差別部落民という特殊階級を取り扱った、いわば社会悪を暴露し、その改善を計ろうとする一種の社会小説であつたのだが、『春』はそのような社会問題小説ではない。『破戒』は作者をある人物に託した「空想物語」であるが、『春』は作者の真実をありのままに描いた小説である。もう一つ、『破戒』を書く時は結構もちろんと用意されていて、背景や登場人物などの案を立てていたが、『春』は一切の結構を立てず、人物の構成もさほど劇的構成の効果が見られないという点が挙げられる。藤村文学は『春』以来、もっぱら『春』の創作手法を一貫させているのである。中村光夫が指摘しているように、藤村の作品系列として『破戒』と『春』の間には何か断層が感じられる。その背景には花袋の『蒲団』の影響があつた。そこで藤村は『春』の道を選んで黙々と作家的生涯をまっとうすることになる。

『春』のテーマは三つに分類できる。

一つ、時代の先駆者として透谷（青木）を中心に展開する青春群像を点描し、それら青年たちの中に透谷を浮き彫りさせて描いている。

二つ、自由恋愛によって封建的な前近代性から脱するという近代人の精神。それは「思へば、言ふぞよき、ためらはずして言ふぞよき」（『藤村詩集』）という自我の発見でもある。そして、それは「またキリスト教の告白の理念に導かれながら、同時にマリア崇拝的な処女憧憬にもつながる」ものである。

三つ、『家』への発展。藤村は「『春』を書いてあるうちにまた今度は『家』を書かうといふ意匠があとから芽ぐんで来ました」（『春』のことがら）と述べている。「理想の春」に欺かれて死ぬ青木（透谷）、「芸術の春」を求めて失敗する岸本（藤村）は構想どおり描くことができた。そして「人生の春」に到達する青年を描こうとしたが、そこで作家藤村を取り巻いている大きい封建的な〈家〉の壁に逢着する。

岡本綺堂「蝶合戦」と山田美妙「胡蝶」の間テキスト性について
道合裕基（京都大学大学院博士後期課程）

岡本綺堂（1872－1939）は、『半七捕物帳』シリーズ（全69話）の作者として有名である。『半七捕物帳』は、明治以前は、いわゆる「岡っ引」をしていた半七老人が、若い新聞記者である「わたし」に自身の手掛けた事件を語るという形式の連作である。

綺堂は、『半七捕物帳』シリーズを書くにあたり、コナン・ドイル（1859－1930）の「シャーロック・ホームズ」シリーズを参考にし、半七というキャラクターを創造した。『半七捕物帳』第1話「お文の魂」（1917）における「江戸時代に於ける隠れたシャーロック・ホームズ」という表現に示されているように、このシリーズが、「シャーロック・ホームズ」シリーズを意識していることを窺わせる。それゆえに、ホームズ譚との比較文学的研究が発表されている。

本発表では、『半七捕物帳』シリーズの一篇「蝶合戦」（1925）を採り上げ、山田美妙（1868－1910）の代表作「胡蝶」（1889）との比較を行う。これまで「蝶合戦」については、物語中での蝶の役割や、「白い蝶」という設定に注目し、白のシンボリズムなどに言及した鄭知恵氏の研究が発表されている。しかし、「蝶合戦」の材源・着想源についての研究は、管見の限り発表されていない。そこで、本発表は、先行研究を踏まえた上で、綺堂と美妙のテキストの連関の可能性を指摘するものである。

綺堂は、「蝶合戦」の着想源についての発現を残していない。しかし、「蝶合戦」と美妙の「胡蝶」とのあいだには、ストーリー展開上の類似点が見出せる。また、綺堂は、『明治劇談 ランプの下にて』（1935）の中で、美妙の名を挙げて、演劇改良運動について論じている。そのため、美妙の作品を読んでいたことが分かる。残念ながら綺堂による「胡蝶」への言及はないが、美妙の代表作であり、有名な「裸胡蝶論争」を巻き起こした「胡蝶」も当然把握していたと考えられる。そこで、綺堂の「蝶合戦」と美妙の「胡蝶」を比較することを通して、美妙から綺堂への文学的受容とその変容を論じることが、本発表の目的である。

日影丈吉「猫の泉」論

— 撮取の関係を兼ねて —

黄如萍（台湾・国立高雄餐旅大学准教授）

日影丈吉「猫の泉」は『宝石』（昭和36年(1961年)1月号）に発表されたものである。

作品について、主人公の「私」は日本人の写真家で南仏のヨンという町を訪れ、その廃市を占領するチベット猫と予言の大時計をめぐる幻想的な物語である。当作品「猫の泉」は従来研究史においてあまり論じられてはいない。その数少ない研究においては、他作品との関連が論じられてきたきらいがある。たとえば、南條竹則は萩原朔太郎の「猫町」「いにしへの魔術」（論者注、Algernon Blackwood, “Ancient Sorceries,” 1906年）¹との類縁性が指摘されている。研究史においては、早くに江戸川乱歩が、「戦後ブラックウッドの「古き魔術」を初読、「猫町」の着想と相通ずるのに驚いた」²との関係が指摘されている。また、清岡卓行も朔太郎の「猫町」とブラックウッドの「古き魔術」を比較し、「猫町」は「古き魔術」から影響を受けている³と結論づけている。近年、材源に関しては、「猫の泉」は、「いにしへの魔術」、「猫町」といった先行作品からの影響に加え、「猫岳の怪」の伝承など口承文芸⁴からの影響を読み解く研究もある。

本論では、小説全体の仕組みを検討した上で、他作品との関係と撮取した主題に注目してみる。論証方法として、まず、「私」の語った話を中心に論じていくことにする。「私」の語った話を追うことで、本作品を捉え直したい。続いて、同様な性格を持つ他作品と共通した要素も探り、日影丈吉文学における「猫の泉」の文学的位置を考える。

1 『恐怖の黄金時代:英国怪奇小説の巨匠たち』2000年7月、集英社

2 「猫町」『宝石』1957年8月

3 清岡卓行「解説」『猫町 他十七篇』1995年5月、岩波書店

4 道合裕基「日影丈吉「猫の泉」における〈異界〉表象とその材源について」『比較文化研究』2017年10月

村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』にみる暴力
—「アイロンのある風景」及び「タイランド」を考察のテキストとして—
范淑文（台湾・国立台湾大学教授）

村上春樹の短編集『神の子どもたちはみな踊る』には、丹生谷貴志の絶賛¹から福田和也の酷評²までその評価は様々である。

また、加藤典洋のように阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件の関連性以外に、「登場人物における親との関係、とりわけ父との関係をめぐり、新しい主題の系譜がここに登場している」³と、各作品に通底する主題を掘り起した研究者もいる。

この「親との関係」が最も鮮明な作品と言えば「アイロンのある風景」及び「タイランド」であろう。前者では順子の中にある父親への不快の記憶、後者では文字化されていないが、主人公さつきが抱えていた心の傷は「父親」に相当する人物とかかわっていると伺える。本発表ではそれらの作品に漂っている暴力、その暴力と家族を含めた社会との関係などを明らかにすることを主旨とする。

1 「『地震』によって生じた表象の危機を巡る連作」であり、「非常に緊密で秀逸な感動的作品」と高く評価されている。丹生谷貴志「壇の中のメッセージ」『文藝』2000.5

2 柄谷行人との対談で「天災の、自然の他者性は一切棄却されて、すべて内面化されている」と酷評している。柄谷行人・福田和也「現代批評の核」『新潮』2004.8

3 加藤典洋『村上春樹 イエローページ PART2』2005.5、荒地出版社、p.109

AIによる文学研究の新潮流
—村上春樹の短編小説を例にして—
葉菱（台湾・淡江大学助理教授）

第三世代のAI（人工知能）において、自然言語処理は大いに進歩を遂げた。AIの書き手は小説がどこまで書けるかということについて、『コンピュータが小説を書く日—AI作家に「賞」は取れるか』（2016）で、佐藤理史は自分が名古屋大学のチームを率いて第三回星新一賞に応募したことを記録している。その中、2015年当時の書き手としてのAIの限界が記録されている。ビジネスライター、或いは株の変動、スポーツの試合経過を伝える記事など一定のフォーマットのある文章であれば、機械的に文章を作ることは可能である。しかし、自由度が高ければ高くほど文章の生成の難度が高まると言う。小説を構成する場面は規則性が弱いものだと指摘されている。類似した場面でも必ずしも同じセリフが利用されるわけではない。こうして、AIの文学における応用は制限がかけられる。

一方、文学研究において、繰り返しという言葉の重複、言葉出現の場面や前後文脈の整理、登場人物セリフの分析などのテキスト分析は、AIの協力によって単純化にする可能性が十分に考えられる。また、AIという機械的な分析による客観的な読解が新たな論点を導くことが期待される。こうして、本発表では、村上春樹の短編小説を対象にして、AIの導入による文学研究の可能性を探る。

太宰治「竹青」試論

—作品の裏表構造に潜む対中文化工作の影—

何資宜（台湾・国立高雄大学助理教授）

「竹青」（『文藝』昭和 20.4）は、清の蒲松齡『聊齋志異』から材を採った翻案小説であり、その末尾には、「これは、創作である。支那の人たちに読んでもらひたくて書いた。漢訳せられる筈である」という「自註」がある。ここ数年、先行論において最も目に付きやすいのは、中国語を母語とする論者たちによる研究が大量に現れたことが挙げられる。それにより、「太宰が中国人に訴えたかったことは何であろう」「漢訳してほしかった太宰の真意」といった疑問も喚起されている。

ここで筆者が特に気になるのは、「漢訳してほしかった太宰の真意」という表現である。太宰の「創作年表」や堤重久宛てのはがき（1944.8.29）を参照すると、むしろ作品の執筆段階でその漢訳作業がすでに決定されていたことが確認できる。しかし、この作品はなぜ漢訳されなければならないのか、ということは今まで誰も触れていない。

本稿では、まず本作品とその下敷きにされた中国諸文献との影響関係を検討した上で、和文漢訳の強い背景にある対中文化工作をあぶりだし、この作品における解読の二面性（裏表構造）を明らかにする。

グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『地球にちりばめられて』

—日本が消滅したことの真意について—

曾秋桂（台湾・淡江大学教授）

越境作家として名高いドイツ滞在の日本人作家多和田葉子は、『献灯使』（2014年、講談社。2017年、繁体字中文訳『獻燈使』瑞蘭國際有限公司）により、2018年度国際交流基金賞を受賞しただけではなく、同年11月にアメリカで最も権威のある文学賞の一つである全米図書賞も獲得した。東日本大震災後、原発に関心を強く持ち続けている多和田葉子は、『百年の散歩』（2017年、新潮社）、『地球にちりばめられて』（2018年、講談社）のような、原発を話題にした作品を続けざまに世に出している。

『地球にちりばめられて』は、今までと違った語り方で原発問題を織り込んでおり、10章によって構成されている。主役と見なされる Hiruko とクーンストがそれぞれ語った3章のほかに、脇役のナヌーク、アカッシュ、ノラ、Susanoo が1章ずつ語っている。その中で、他の人物と対面した時、一言も話さなかった Susanoo が第8章で語ったことが意外であった。そこから浮かび上がってくるのは、原発災難に見舞われ、消滅した日本のことである。

ポスト 311 以後、原発問題を巡って作品を発表し続けている多和田葉子が文学創作を通して訴える理念を追求すると共に、今回は、エコフェミニズムの視点から、地球を一つの空間とした背景に、かつて見られない新しい語り的手法で描いた『地球にちりばめられて』での日本が消滅したことの真意を明らかにしていきたい。

キーワード：エコフェミニズム 多和田葉子 新しい語り 日本が消滅したこと 原発

三月三日・上巳の起源と伝承について
— 日中比較民俗学の視点から —
陳翰希（早稲田大学大学院博士後期課程）

本稿は、三月三日・上巳の起源と伝承についての研究である。三月三日・上巳の行事は古代中国に起源をもち、律令制度の伝来とともに日本に受容された。伝来した当時の行事の形式は曲水宴であり、それについての研究も数多く行われていたが、古代中国における三月三日の起源については検討が不足しており、誤りも多く存在している。本研究において、上巳祓が定着した漢代より前の時代までさかのぼり、上巳を形成する要素を逐一分析した。それによって、上巳の行事は複数の源流をもち、かなり複合的な形で成立したことを解明し、三月三日の研究に新たな示唆を与えた。また、三月三日・上巳の行事起源にまつわる伝承は中国と日本の両方に残っており、それについて研究はいまだに皆無に近い。本研究においては、日中両国の伝承を古代文献より拾い集め、その異同を分析し、比較を行う。三月三日・上巳の起源、そして伝承を研究することを通して、古代日本はいかに古代中国の影響を受けながらも独自の解釈を展開したかがうかがわれるのである。

漱石漢詩と莊子

—題自画を中心に—

呉雪虹（台湾・高雄市立空中大学助理教授）

漱石漢詩が作者の肉声だという見解を提出したのは飯田利行である。明治43（西暦1910）年から大正元（1912）年にかけては、漱石は修善寺大患と称される時期であった。大患の後、午前は小説の創作に専念し、午後は漢詩の推敲に力を入れていたというのは周知のことである。大正3（1914）年ごろ、漱石の内心には、何かこだわっていたものがあるように思われ、題自画に書き添えた漢詩に、《静寂》の心境を覗かせている。例えば、大正元年の漢詩には、「独坐聴啼鳥 関門謝世嘩 南窓無一事 閑写水仙花」という詩句があり、自宅禁錮というほどではないが、画中に描かれた静寂な雰囲気にも包まれながら、それを楽しんでいるように感じられる。また、貧乏な暮らしに対する考え方を表している漢詩もある。「葉密看風動 枝垂聴雨新 南軒移植後 君子不憂貧」という漢詩に醸し出されているが、君子が貧しい暮らしに不満を言わずに生きていく意志を明らかにしている。

一方、莊子は一生貧乏な生活をしてきた。文献によれば、一時粟を販売していたことも、草で藁靴を編んでいたこともあった。本人はやつれて、ぼろぼろの服を身にまとっていた。周囲から異様な目で見られても平気な顔をしていた。かつて戦国時代の魏国の王に拝謁した時、「どうしてそんなにみすぼらしい格好をしているのか。」と聞かれたが、莊子は、「貧困ではあるが、困窮しているわけではない。書生は徳が大切で、それが実行できない場合は困窮だといえるが、古着を着ている場合は貧困だ。これは恵まれないとか、ついていないとか言えるだろう。」と堂々と返事した。莊子は安貧楽道の態度で生きていたと思われる。<安貧楽道>とは、貧に安んじて道を楽しむという意味である。

修善寺大患後の漱石は、自作の画に〈君子不憂貧〉などの詩句をつづった漢詩を添え、家計に追われる小説の創作に一息入れて、《題自画》の世界を楽しんでいた。

日韓相互理解モデル・浅川巧
李尚珍（山梨英和大学准教授）

2019年は、1919年3月1日の韓国独立運動から100年目の年である。そして、1945年に韓国が日本の植民統治から解放されてから74年が経ち、また、1965年の国交正常化から54年が経った。その間、1998年に当時の小渕恵三総理大臣と金大中大統領が「日韓共同宣言－21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」を発表し、その後の日韓文化交流の機運を高めた。韓国では1999年から映画や音楽などの日本の大衆文化が段階的に開放されて若者を中心に関心が高まり、日本では2003年から韓国ドラマ「冬のソナタ」の人気から韓流ブームが起きた。そして、2002年のサッカーワールドカップの日韓共同開催は日韓両国民の相互関心を強めるきっかけとなった。

一方、日本による韓国併合をめぐる日韓相互の近代史認識には歴史教科書問題や従軍慰安婦問題、領土（竹島／独島）問題などの衝突と対立も目立ってきた。報告者は、大学の授業や講演会で出会った両国の人々から、しばしば相互認識・理解に曖昧なものを感じるがあった。その原因として、それぞれの国に関する知識には断片的かつ偏向的なものが多く、異文化としての理解が容易ではないことや日韓相互理解における有効なモデルが提示されることが少なかったことなどが挙げられる。

そこで、本研究報告では、日韓相互理解における実践的かつ効果的なモデルとして、1914年から1930年まで韓国で暮らした、日本人・浅川巧（1891～1931）の韓国理解の実践的方法を提示し、これから日韓両国で共有できる「相互理解モデル」を明確にすることを目的とする。

浅川は、林業雇員として植民統治期の韓国に暮らしていたとき、韓国の日常的な習慣や生活様式を身につけ、生活者としての体験によって日常生活から韓国文化の独自性を認識することができた日本人であった。そして、「朝鮮民族美術館」（1924年、ソウルに開館する。）開館活動からも異文化・異民族理解において今日の私たちが忘れがちな伝統・固有文化への眼差しがうかがえる。浅川は、韓国民族の古の情緒から伝統文化を読み取る姿勢を保持し続け、日韓相互理解や交流に必要な「歴史の正・直視」を実践したのである。

報告者は、2009年度から山梨英和大学の選択科目「日韓文化交流史」（2016年より「国際交流論」となる。）の中で浅川を取り上げて、浅川と日韓関係を考察するレポートを受講生に課している。2010年には、2009年度と2010年度の受講生のアンケート調査結果を分析し、「浅川巧の異文化理解モデルに関する一試論」（『山梨英和大学紀要』第9号）を発表した。

本研究報告では、上記の授業の2011年度から2018年度までの受講生のアンケート調査結果を分析し、浅川の実践型モデルが日韓相互理解・交流のモデルとして継続的・有効的であるのかを考察・検証したい。

日中の民間説話から読み取れるジェンダー観

—異類婿譚から考察する—

張宇（大阪市立大学大学院博士後期課程）

発表者は、以前に行った報告において、日中異類婚姻譚の民話のなかで特に異類女房譚を研究対象として扱い、そこから読み取れるジェンダー観を比較した。その比較を通して、日本の民話の中では女性のほうが積極性を持ち、中国の話では男性のほうが積極性を持つことを明らかにした。また、日本の話の中では、女性が家庭に富をもたらす能力が重視されているのに対し、中国の話においては、そのような表現がないことを示した。今回の発表では、日中の異類婿譚に焦点を当て、異類女房譚の比較から導き出されたジェンダー観の相違点が、異類婿譚においても認められるかを確認し、さらに、そのジェンダー観が異類婿譚の中でどのように表現されているかを考察する。そして最後に、その考察に基づいて、日中の異類婚姻譚の民話から読み取れるジェンダー観をまとめ、そのジェンダー観が異なる理由を探ってみる。

森鷗外と伽羅

金英（韓国・大邱韓醫大学教授）

江戸時代の『翁草』をもとに森鷗外は大正元年(1912)に『興津弥五右衛門の遺書』というタイトルの短編歴史小説を発表する。これまで約 100 年間、鷗外文学研究者によりかなりの研究が行われてきたにもかかわらず、なぜ明治天皇の逝去と乃木将軍の割腹事件を扱った歴史小説に、細川家の香木事件を引用しているのであろうか、という尤も基本的な疑問に対する研究は見当たらない。作品の最も重要な素材であり、作品のメタファーとなる香木と作品との連携性を扱った研究がないのである。

本発表ではこの点に着目し、この作品の最も重要なメタファーとなる香木と香木事件を引用した小家の意図・作品との連関性、作品主題に及ぼす向目の効果に注目した。特に、これまでの研究では見られなかった明治天皇と香木との関係、作品の中の和歌と香木に関する深みのある解釈を試みる。

マカオの『知新報』から見る、梁啓超の東学（東洋の学問）影響下の新聞思想について
周聖來（横浜外国語学校アーキヴォイス顧問）

中国近代のメディア史において、香港、上海、天津、北京等はいずれも国内外の学者が話題にしがちな場所である。なぜなら、これらの場所には有名な新聞、刊行物があるだけでなく、著名な新聞の発行人がいるためでもあり、重要な報道や事件についてのインタビューおよび知識や文化、知恵等が伝わり、歴史の大転換期には重要な世論を導いてきたためである。しかし、前近代の中国ニュース伝播版図においては、ある場所と前述の都市との相対論を展開することが難しかった。その場所とは、マカオである。

マカオの『知新報』は、戊戌変法時期におけるブルジョワジーの維新派によって華南地区において創刊された最も重要な宣伝刊行物である。世に出された4年間で、戊戌前後の維新派の社会意識や政治思想、文化的観念の動向が放出された非常に典型的な新聞だった。主導者は、梁啓超、何樹齡、康広仁、徐勤、韓文挙、劉禎麟、吳恒煒、陳繼儼等で、多くは康有為の弟子であった。『知新報』の周囲には、当時の華南地区の維新派の逸物が多く集まり、マカオはこれにより維新派の南方における重要な基地となった。

当時の報道水準から比べると、『知新報』は当時の優秀な新聞と言える。また、『時務報』との呼応により、維新言論の発表、変法思想の宣伝、愛国救国の情熱と切っても切れないものであった。『知新報』は華南地区で販売されただけでなく、遠く日本やベトナム、シンガポール、アメリカ等の地でも販売され、昔の華南の世論に影響を与えていた大新聞であった。百日維新の挫折後、その他維新派の新聞は廃刊へと追い込まれたが、『知新報』は継続して刊行され、当時では唯一、維新変法を鼓舞した新聞とあった。

その意義は、当代人物と社会思想にあるだけでなく、さらに深い励起により国家民族の情熱を奮い立たせることにある。『知新報』は、マカオで起こり独自の政治背景にあったため、言論は自由に開放され、中国南方で世論の先鋒となり、中国新聞史上非常に重要な位置にある。国内の『時務報』、マカオの『知新報』にかかわらず、日本での14年の亡命期間に、梁啓超は、ついに報道を富国自強の重要な道筋へと据えることができた。以前の「去塞求通（詰まりを取り除いて通りを良くする）」という思考も、「政府を監督し、国民を導く」という願望も、国家隆盛のための理想を新聞紙上に託し、それによって目的を達成しようとしたのである。

清末中国の雑誌『教育世界』における西洋文化の受容

—王国維周辺にもたらされたゲーテ資料を中心に—

小島明子（東京福祉大学・大学院留学生教育センター基礎教育特任講師）

『教育世界』（1901年～）は清末中国において羅振玉が創刊し、約7年間に亘り刊行された雑誌である。その現物は日中に点在し、さらに大部分を占める記事には著者や出典が記載されていないため、全貌が不明であったが、筆者の調査によれば、その大半はほぼ同時期日本資料の翻訳であり、異文化摂取の様子が窺える。科举廃止前後の中国が教育改革のため日本の制度や学術を学んだ形跡が認められることはつとに指摘されてきたが、日本を介した西洋文化の受容についても注目される。

当誌は著名な学者である王国維（1877～1927年）が青年期に編集に関与し、翻訳や著述を発表した媒体としても知られている。しかし、従来、王国維との関係については不明な点や誤解が多くあった。王国維は後半の主編であり、一部の未詳記事の著者でもあったとされてきたが、実は主編ではなく、またほとんどの記事が王国維の著述ではないことが明らかになってきた。ただし、その中には王国維による翻訳も混入していた可能性や影響関係は否定できない。よって、当誌は清末の文化状況のみならず、王国維の学術環境を把握するためにも貴重な資料と目される。

ところで、青年期の王国維がショーペンハウアーやカントなどについて相当の知識を有していたことは、彼が『教育世界』で発表した著述や翻訳により認められ、事実として共有されてきた。だが、彼の西洋文化への関心は哲学のみならず広範囲に及んでいたことについてはあまり研究されてこなかった。たとえば、ゲーテに関しては「紅樓夢評論」で『ファウスト』について言及しているが、何によりいかにどの知識を得ていたかは明確でない。そこで、本発表では、特に『教育世界』により王国維周辺にもたらされていたゲーテに関する情報の質量を中心に考察し、当時における当誌の価値について論じたい。

具体的には、主に「德国文豪格代希爾列爾合伝（ドイツ文豪ゲーテ・シラー両伝）」「格代之家庭（ゲーテの家庭）」（1904年）二件の記事に着目する。発表者の調査によれば、これらも日本資料の抄訳であったが、素材をさらに分析したところ、英文、独文に依拠したと思われる内容も含まれているなど、当時すでに中国語で紹介されていたゲーテ関連資料をはるかに上回る情報量が確認できた。ゲーテがまだ周知されていなかった時代の中国において、おそらくは流布しておらず、ましてや『教育世界』周辺人物らの目に触れることはなかったであろう外国資料の内容が、日本資料の翻訳を通し間接的かつ部分的に受容されたものと考えられる。

なお、本発表は一部において、日本学術振興会、平成30～33年度、科学研究費（若手研究）、研究課題名：「王国維と清末雑誌『教育世界』：文学活動およびその周辺」（JP18K12308）の助成を受けたものである。

Karate for Life:

From the Experience of Sri Lankan and Japanese Karate Practitioners

Petra KARLOVA (Assistant Professor, Waseda University)

Karate as inherent part of human life has been introduced by the founder and propagator of modern karate Funakoshi Gichin (1868 -1957). He defined three values of karate: 1. physical education, 2. self-defense and 3. mind cultivation. Based on Funakoshi's writings, this research examines the usefulness of karate for its practitioners in Sri Lanka and Japan in their daily life. The aim is to identify common points for both countries, as well as differences coming from specificities of Sri Lanka and Japan, and discuss these ideas together with Funakoshi's arguments to form a dialog between the present and the past of karate.

The author conducted questionnaire surveys to karate students and instructors, and interviews with karate instructors in Sri Lanka and Japan in 2017 and 2018. Both quantitative and qualitative analyses were applied to the data. For qualitative analysis, coding was used.

The results of quantitative analysis showed that the most frequent reason from the multiple choice for karate practice was self-defense/martial art: 75% of Sri Lankan and 50.8% of Japanese. This percentage was especially high for children. Therefore, Sri Lanka with predominantly young practitioners in sport karate surpassed the percentage of the Japanese who practice self-defense-oriented traditional karate. As other reasons, Sri Lankan respondents indicated mental skills (40%), health (25%) and developing personality (18.7%), while Japanese respondents chose developing personality (50.8%), physical skills (49.1%) and mental skills (45.7). This corresponds to Funakoshi's idea of karate as martial art cultivating human being in the physical as well as mental aspects.

The qualitative analysis was done on the question "How does karate influence your daily life?" Both Sri Lankan and Japanese practitioners found karate helpful for developing mental skills, personality and health in their daily life. The difference between Japan and Sri Lanka was observed especially among young practitioners. Sri Lankan linked karate to education, health and activeness, while Japanese frequently mentioned the manners. Sri Lankan specificity is probably caused by the situation of developing country. Japanese emphasis on manners probably comes from Confucianism. Funakoshi also accented courtesy and humility as an effective way to avoid useless conflict. However, in Sri Lanka, the expression of politeness is different from Japanese culture. Thus, for Sri Lankan, connection of karate with politeness is not so apparent. In the usefulness of karate for daily life of adult practitioners, there was bigger diversity, but some of common points were calmness, strong spirit, and health.

日本的経営文化としての終身雇用制度
—ヨーロッパの学術的イメージの変遷において—
岩佐托朗（大阪経済大学准教授）

終身雇用制度は、日本的経営制度の重要な特徴の柱であると位置づけられてきた。この点はヨーロッパの学術的なイメージにおいても同様の認識がなされてきた。本発表では、イメージをヨーロッパの学術研究者達が形づくってきた概念を基に定義する。即ち、イメージとは、現実を構成し、影響力ある役割を持つ。また、イメージは、何度も繰り返され共通のテーマを扱い、ある程度、偏見や矛盾を伴っている。そして、イメージとはかなりの程度、一般化、単純化、そして、ステレオタイプ化を伴っているものとする。

ヨーロッパでは、1970年代、オイルショックを始めとして、経済的、社会的、また、アイデンティティ的な危機を迎えていた。そのような中、世界経済を牽引し始めた日本に対し、ヨーロッパのモデルになる得るものがあるかもしれないという背景から日本研究が盛んになった。その研究の途上において、日本的経営文化としての終身雇用制度が注目を浴びた。終身雇用制こそが、従業員が安心して会社に貢献するモチベーションとなり、また、会社側も、安心して従業員に投資できるとして、この長期的な雇用契約関係に大変好意的な評価がなされた。また、この終身雇用制度には、日本人が抱く文化的な背景が大きく影響していると指摘された。即ち「イエ」社会である。日本人は「イエ」社会であり、家族という最小単位の「イエ」から始まり、会社も「イエ」という共同体の一つであると分析された。

しかし、このような平和的、協調的なイメージの終身雇用制度も、1990年代以降、大きく変化することとなる。背景としては、日本経済のバブル崩壊によって、日本的経営も変化せざるを得なくなったことが第一に上げられる。大企業においても、終身雇用制度の維持は大変困難な状況となった。また、もう一方で、ヨーロッパ研究者のイメージの中において、これまでの研究では日本の大企業が中心であり、中小企業を分析した場合には、大企業ほど、そもそも終身雇用制度が導入され維持されている訳ではないという新たなイメージも提示され始めた。

結論として、日本の終身雇用制度自身がある種のフィクションであり、他大に理想化され過大評価されてきたものであるという分析がなされた。1990年以降は、労働力の多様化に伴い、イメージは、複雑化し、多岐に及んでいるとも分析された。その背景として、世界がより複雑化し、もはや単純なモデルでは定義できないということにも言及しなければならぬ。

教育の視点からみたオランダと日本

—比較文化的考察—

高坂京子（立命館大学教授）

本発表は、オランダと日本を主として教育の視点から比較文化的に考察し、相違点と類似点を明らかにすることにより、日本がオランダの教育から何を学べるのかを示そうとするものである。オランダと日本との関係は17世紀初頭にまで遡り、日本は鎖国政策の中においても、ヨーロッパ諸国では唯一、オランダとは長崎での貿易を通じて外交関係を維持してきた。また、オランダを通して入ってきた蘭学は、日本の開国に向けての下地を形成した。そのように日本とは深い歴史的関係を保ってきたオランダであるが、現在はどうか。教育改革や働き方改革（ワークシェアリング）などにおいて、一歩先をゆく取り組みを行っており、その先駆的精神から学ぶところは多い。この発表においては、そうしたオランダの教育事情を日本と比較し、とくに英語教育に関わる試みを中心に据えながら考察を進めたい。

オランダは、2013年のユニセフ「子どもの幸福度」調査で1位になった国であるが、EF（English First）による英語能力指数ランキングやTOEFL iBTのスコアランキングにおいても常に世界の1位～2位を獲得し、英語力の非常に高い国としても知られている。英語とオランダ語は系統的に接近しており、言語文化的距離が近いことが有利に働いている点は否めないであろう。しかし、それだけでオランダ人の英語力が高くなったわけではない。ここ20年ほどのオランダの外国語教育政策の変革、とりわけ初等教育への英語の早期導入や、中等教育へのバイリンガル教育（TTO）のパイロット的導入とその裾野の拡大が大きな影響を及ぼしている。また、平等を重視するオランダの文化環境が教育に及ぼす影響も大きい。

筆者は、2017年3月と7月の現地視察を準備段階とし、2018年3月および12月に2度にわたってオランダで現地調査を実施した。初等教育機関2校、中等教育機関3校を訪問し、さまざまな授業を参観したり、教員や生徒たちにインタビューすることにより、有意義なデータを収集することができた。今回の発表では、オランダで収集してきた生データを分析し、日本のデータと比較することにより、それぞれの国の教育の特徴を比較文化的に考察し、日本の外国語教育がそこから学べる点を示唆する。

同志社大学今出川キャンパスマップ



比較文化論 No. 37

発行：

2019年5月18日

日本比較文化学会

本部事務局：

〒803-0835 北九州市小倉北区井堀 1-3-5

西南女学院大学 林裕二研究室内

日本比較文化学会第41回全国大会・2019年度日本比較文化学会国際学術会議
準備委員会事務局：

〒607-8175 京都市山科区大宅山田 34

京都橘大学国際英語学部 北林利治研究室内

e-mail: VZV00407@nifty.com

印刷：

株式会社 田中プリント

京都市下京区松原通麩屋町東入石不動之町 677-2